木村探元日記

山下廣幸

はじめに

木村探元は、薩摩画壇の江戸時代中期を代表する絵師であるが、探元は享保十九年九月から翌年五月にかけて上京し、禁裏や近衛家などのために絵の制作を行っている。この間の旅の様子や京都滞在中のできごとを日記として記録したものが「木村探元日記」である。写本が数点存在しており、名称が若干異なるが現在、東京大学史料編纂所所蔵の「木村探元日記」、鹿児島市立美術館所蔵の「木村探元上京日記」、『史料京都見聞記』（巻一、法蔵館）中の「京都日記　木村探元」（無窮会図書館紳習文庫本・伊東宗裕氏翻刻）、鹿児島県立図書館蔵の「木村探元上京日記」などを確認しているが、すべて写本で原本は所在不明である。

この中で筆写者が判明しているのは、鹿児島市立美術館本で、奥書に「本書は木村探元静隠翁が享保十九念九月近衛関白家久卿の御召しにより京師へ上京せられし時の日記なり、皆明治三十六歳次昭陽単閼八月中旬於秋夕亭寫之、井上良吉　印」とあり、『薩藩画人傳備考』の編者として知られる井上良吉が、明治三十六年に筆写したことがわかる。

ここでは、東京大学史料編纂所所蔵本を底本に、不明な部分は他の諸本で補いながら解読し、読み下し文にしたものを紹介するが、それでも意味が判明しがたい部分もある。今後さらに時間をかけて完全に校訂する必要を感じている。ちなみに東京大学史料編纂所本と鹿児島県立図書館本は行書体で平仮名書き、鹿児島市立美術館本は楷書体で片仮名書きである。また、無窮会紳習本は印刷本しか確認していない。

探元の略歴

木村探元は、延宝七（一六七九）年七月十八日、父木村時喜（空山）と市来氏の女を母として、鹿児島城下甲突川河畔（現鹿児島市平之町、平田橋左岸付近）に生まれ、明和四（一七六七）年二月二日、八十九歳の高齢で没した。探元の略歴を『木村探元小傳』（公爵島津家臨時編纂所、大正十五年一月）によってまとめてみると、次のとおりである。

幼名は金平といい、後に金左衛門と改める。元禄四（一六九一）年、十三歳の時に郷土の絵師小浜清兵衛常慶について画を学び、同八年には時員の雅号を使い、同十二年には守廣と号している。同十六（一七〇三）年、二十五歳の時に江戸に出て狩野探信守政（鍛冶橋狩野家二代）の門人となり、探信を通してその父探幽の画法を学んだといわれ、二年後の宝永二（一七〇五）年に帰国する。同四年、二十九歳の時には、鹿児島城造作に際し、御対面所上段合天井や中段孝行ノ間敷舞台軒上などの絵を描いた。また、この年藩主島津吉貴から剃髪の命があり、探元の名を賜っている。

正徳四（一七一四）年、琉球の江戸慶賀である掌翰史程順則が鹿児島に来航、藩主吉貴とともに江戸に登り東照大権現宮に参詣するが、この

時探元の作品に賛を入れている。

享保十一（一七二六）年、島津吉貴夫人於須磨の方が伊勢大廟へ参宮の折り、側役伊集院久盛、美世清己などと共に供奉する。伊勢参宮後、京都に向かい近衛殿において近衛家久卿に拝謁する。

享保十九（一七三四）年、近衛関白家に呼ばれ、門人の押川元春（生没年不明）、能勢探龍（一七〇二～一七五五）と共に京都に赴き翌年四月末まで滞在した。この間法橋に叙せられ、近衛家や禁裏のために作品を描き、大貳の呼び名を賜っている。

宝暦十一（一七六一）年、八十三歳の時には藩主島津重豪の命により絵を献上し、褒美として白銀を賜り、これをもとに三暁庵を造立した。

明和四年に没し、松原山南林寺に葬られたが、この墓は、大正九（一九二〇）年十月、鹿児島市小野の高加木に改葬されている。探元は八十九歳の生涯を通じ、多くの作品を残しているが、このほか書、茶道、華道、詩歌などにも優れた才能を発揮しており、当時の薩摩藩を代表する文化人と位置付けることができる。

上京の旅程

探元は、享保十九年九月十四日鹿児島を発って京都に向かうが、小倉までは徒歩、瀬戸内海は大坂まで船で、そして川船に乗り換えて京都伏見まで二十八日間かけて旅をしている。

この間の動きをまとめると次のとおりである。但し、かな書き表記の地名は、現在の地名に置き換えたものをカッコ内に記し、現在の地名と確認できなかったものについては原文のままにした。旅の途中における詳しい動きについては、後述の日記を見ていただきたい。

九月十四日　鹿児島―市来湊
十五日　市来―向田―高城―麦の浦―西方
十六日　西方―尻無―阿久根―米ノ津
十七日　米ノ津―水俣―津奈木湯ノ浦―佐敷
十八日　佐敷―日奈久―球磨川―八代
十九日　八代―小川―宇都―川尻
二十日　川尻―熊本城下―山鹿
二十一日　山鹿―南の関―宿の町
二十二日　宿の町―府中高良―山家
二十三日　山家―内野―木屋
二十四日　木屋―黒崎―小倉
二十五日　小倉―下之関
二十六日　下之関
二十七日　下之関―長府―下之関
二十八日　下之関
二十九日　下之関
三十日　下之関
十月一日　―つわ―かろと（鹿老渡）
二日　かろと―亀の首―御手洗
三日　御手洗
四日　御手洗―鼻ぐりの瀬戸―いわき（岩城）―備前のとも
五日　とも―下つゐ（下津井）―牛窓の湊
六日　牛窓―備前のたぶ
七日　たぶ―姫路―でふ―明石の浦―須磨の浦―神戸

八日　神戸―西宮―大坂
九日　大坂
十日　大坂
十一日　大坂―平かた（枚方）
十二日　平かた―橋本―伏見

上京中の主な動き

前述のとおり「木村探元日記」は、享保十九年九月から二十年五月にかけての九カ月にわたる探元自身が記した日記である。この間の動きについても『木村探元小傳』に記されるが、ここでの記述は、この日記を元にしたものと思われる。

享保十九年は、探元五十六歳の年であるが、この日記に記録される上京中の主なできごとを紹介しておく。

享保十九（一七三四）年九月十四日、近衛関白家久卿のお召しにより、島津吉貴公の命を奉じ、門人押川元春・能勢探龍を従えて鹿児島を出発する。

十月十二日京都に到着、十七日京都留守居堀万右衛門に伴われ近衛邸に伺候し、諸太夫村井右膳の取次によって家久卿に謁した。

探元の上京の目的は、禁裏ならびに院御用のために作品を制作するためであったが、近衛家の執奏により十一月二十七日に法橋勅許の御沙汰が下された。

十二月朔日、廣橋家において口宣案と宣旨を受け取り、その後禁裏御所及び春宮御所に伺候している。三日には再び禁中に召され、衝立の絵を描くことを命ぜられた。十六日には、さらに院御所の屏風も描くように下命があり、このため大徳寺の探幽筆松の屏風を見たり、その他多くの絵画を参考にする工夫をしている。

まず二十八日に、屏風の花鳥一双及び院御所屏風の下書きを近衛家に持参、さらに新年の一月十九日には近衛家の山水の屏風を差し上げ、褒美の和歌を拝領している。

二月二日には、角倉與市宅において、現在重要文化財に指定されている青磁茶碗（銘　馬蝗絆、東京国立博物館蔵）を見学し、これを図示し、詳しい記録を残している。二十一日、禁裏衝立両面の絵を完成し、近衛家諸太夫村井右膳と同道し禁裏御所に参内し奉呈した。この時、「薩陽法橋探元」と署名するように命ぜられ、「淨徳堂法淨」という唐彫りの印を一つ押している。

次いで三月十日、院御所の金花鳥の屏風絵も完成し奉呈した。二十日には、この度の禁裏院両御所の絵の御用が首尾良くできたことにより、三夕寄合書の和歌ならびに緞子五端が下賜されている。

また、この日近衛関白邸に参殿した時に、三幅対の下書きを提示し清書をするように、そして今回の奉行を務めた綾小路、八條両卿へ参殿し、絵を一幅ずつ進上するように命ぜられている。

閏三月四日には、禁裏及び院御所から拝領物があった。六日には、近衛家に参上し、朱書の鍾馗二幅をご覧に入れている。この時、さらに二幅の絵を命ぜられるが、「薩陽大貳法橋探元」と署名するように指示され、「大貳」の呼名を賜った。八日には、綾小路、八條両卿に進上する絵も完成し、近衛家に持参している。

十日には席画の希望があり門人押川元春、能勢探龍と共に参上、関白、中将、閑院宮など宮家堂上方多数の前で、探元、元春、探龍の順で絵を

描いて見せた。

二十四日には、近衛家の河原別業において、絵に関心の高い近衛准后家熙公の招待があり、禁裏院御用が好都合に運んだと褒詞を受け、絵について言葉を交えている。この時、雪舟、探幽、その他多数の絵画の観覧を許されている。

四月二日には、近衛家に三幅対の絵を進上、八日には暇乞いに参上するが、この時家久卿から中御門天皇御雑答御宸筆の掛幅を前藩主島津吉貴公への贈呈依託と於須磨の方への伝言を受けている。翌日には河原の准后家熙卿に謁し、卿好みの臨写物を贈呈する。

そして、四月十八日、京都を出発、大阪を経由して、五月十二日に鹿児島に帰着した。

日記の活用

この日記がどのような調査、研究に使えるか、今までの研究を紹介しつつ二、三の例を示して考えてみたい。

具体的な例としては、当時河原町竹屋下り町に住んでいた絵師の渡辺始興（求馬）との交流を読みとることができる（今回底本とした写本では、渡部求馬と記す）。始興は京都の人で、初め狩野派を学んだが、のち尾形光琳に師事し、両者の技法で並行して描いた。二十五歳の頃から近衛家熙に仕え、古画の模写に力を注ぐ一方、写生画において円山応挙にも影響を与えたと言われる。

日記に表れる記事を紹介すると、最初は十月二十三日の項で、近衛家に参上した時に会っており、探元は「久々に逢い候」と言われており、以前から面識があったことが窺われる。二回目は、十二月十八日の項で、堀万右衛門宅で始興と共に御馳走になっており、席上始興が禁中御用の屏風を命ぜられており、その下書きを探元に見せている。三回目は、一月十一日の項で、始興と泉涌寺内法音寺で落ち合い、座敷のすべてを見学している。四回目は、翌十二日の項で、前日の御礼のために前述の住所を訪ねるが留守であった。五回目は、閏三月十五日の項で、探元が始興宅を訪ね、制作中の禁裏御用の屏風を一見している。六回目は、二十四日の項で、河原別業において始興と共に邸内の作品を見学している。

また、この日記を読んでいる途中で、この日記が絵師の僧位叙任についての解明を進める資料として役立つことも知った。（「絵師の僧位叙任をめぐる断章―『画工任法橋法眼年月留』の紹介をかねて―」、野口剛、『京都文化博物館研究紀要　朱雀』第十三号。二〇〇一年）。前述のように十一月二十七日の法橋勅許の沙汰から十二月朔日の口宣案・宣旨の受領、それらに対する謝礼の仕方、また近衛家の後ろ盾による口宣案・宣旨の同日発行など興味深い。

このほか、旅日記として薩摩から京都への経路・日数・交通手段などの研究、京都在住の人物、社寺や名所旧跡、作品制作の過程・様子、作品の献上の様子、年中行事の開催と見物の様子、作品に落款を入れる場合の手続き、事あるごとのお礼の仕方、振る舞われる料理の献立、床飾り、人々とのつき合い、薩摩藩側の世話役と近衛家の人物、御所院の人物、当時京都にあった名品と所蔵者の関係などを知ることができる。

このようなことから、今後いろんな目的を持った調査研究に役立つ可能性を秘めているような気がしている。今後とも詳細な解読、解釈に努め完全な解読文にしていかねばならない。

木村探元日記

以下日記を紹介するが、解読にあたっては、原則として常用漢字を用い、変体仮名は平仮名に改め、現代仮名づかいになおした。また、適宜句読点を付して、読みやすさを考えた。

享保十九年甲寅九月十四日、都の方へ赴きけるに、今日は空の景色も昨日に似ず、日影も晴れて行方遥けき旅の空頼み思うにつけて、

春日山神の恵みに玉鉾の道安らけき秋の旅人

この頃、島津大蔵殿市来に入湯しておわしけるが、立ち寄るべき由鹿府にても仰せありけるに、与力の人鹿府へ帰るに横井にて逢いて待たせ給うに必ず参るべき由仰せ事なり。さらばとて夜に入りて参りたるに、様々もてなし給い、山里ともいわずいと興ありて、御茶手ずから点てさせ給いぬ。さて、山も田頻も月照り渡りて、所の静けさたとうべきなし、

故郷を出でて湯ある山里に君が光りの月を見るかな

かくて、九つの頃ほい市来の湊に着きぬ。

十五日　晴天

湊をば六つ半の頃出で立ちて向田に着きぬ。今日は新田宮の御祭りにて、参れる人おびただし。町のはずれ川の辺に喜左衛門といえる者の宿に暫し休らいて、川を渡るに渡し船おびただしく、参詣の人の足集いていと賑やかなり。遥に御山を拝み奉りて高城の馬次に来たりて、馬人の来る間遅くて様々責むれども、新田宮の祭りに皆参れる由にてすべきようなく、宿の女のいと難しげなる貌して、早く立ちねかしと思う気色詮方なし。この間に伝え聞きし、信高寺という寺におわします観世音拝み奉らんとて参りけるに、主の僧も八幡の祭りに参りけるにや人音もなし。客殿に参りて拝み奉る。この観世音は、往昔高城氏のここ持てるが、娘のめしいたるありけり。観世音に深く祈りて侍るに娘の目元のごとし。参りて拝むに御目はしりて涙流れさせおわします。父母悲しみ奉りて信仰せしとかや。今も拝み奉るに左の御目げにさなりと見えさせおはします。さて、暮れかかる頃ほひ、馬人ども来りて行くに、やがて夜に入りぬ。麦の浦といふ所霧深く虫の声々聞くも飽かず。月照りて西方の坂漸く登り下りて、四つ過ぎの頃ほい西方に着きぬ。

十六日　快晴

まだ明けやらんに、宿の後ろ海の辺に出て見るに、西の海面晴れ渡り月の傾く景色たぐいなし。元春・守成を呼びて共に見るに、山々夜深きに遠く近く見え渡りて、波近き雲に入る月の有様いと珍らかなり。かる眺めはたえず旅する人だにも度々やは見る。

里の名も月の行方も西方の濱の眺めはいつか忘れん

日の出る頃ほい宿りを出でて行くに、海の方に住居珍らかなる里あり。駕籠かけるものに問えば、しなし（尻無）という里なりと言う。里人あまた集まりて船引き出し、高くののしる声聞こえたり。それより下り上がりの坂多くして、昼の頃ほい阿久根に着きぬ。阿久根に着きたるに、ここは当時同名四郎左衛門、島津内記殿留守預かりて侍れば、曖勝目平左衛門出られ立宿申付られ取り持たれたり。旧知の勝目郷左衛門といえる人も出来たりて、上京の祝述べられたり。また中俣休右衛門が姉もここに侍りければ、これも出来たり。やがて野田に着きたるに、郡見廻庄屋は島津大蔵殿に仕えし人々にて、権八がよく知れる人にて立宿申付られ取り持たれたり。やがて米之津に着きぬ、ここに松田三右衛門殿山方の勤めに居られしが、旅宿に見廻れたり。

十七日　曇天

米之津を立ちて水俣へ着きぬ。今日は険しき坂のみにて、津奈木湯之浦にて駕籠の者次ぎて来る道にて、御国の馬喰共馬おびただしく引き連れて登るに逢いぬ。一坂登る頃より雨少し降り来りて、佐敷に着くまで降りぬ。やがて止みぬ。宿は薩摩屋伊兵衛所なり。

十八日　雨天

今朝雨止まず、佐敷、赤松の二坂かろうじて登りぬ。日奈久の問屋彦兵衛が家に暫し休み、酒など呑みて立ちぬ。堤の側、野に通う径あり。去りし午の年、於須磨の御方伊勢詣させ給う時、御供つかいまつりて、御下向六月にて堪え難き暑さ故、御輿を大きなる楠のある元に立て凌がせ奉りけるが、今なお、その木侍りけるに、

手を折りて過ぎにし年を数うればはや九年も里の下陰

今日はまた雨宿りせむいにし年照る日いといし森の下陰

かくて球磨川渡るに、予が荷付けたる馬船の内にまろびて、既にあやうかりけれども、しさび侍らず渡して、七つ半時に八代に着きぬ。問屋正酒屋次七が宿に泊まりぬ。次七今の名は五郎右衛門。

十九日　半天（晴）雨降らず

六つ半時八代を立ち、小川の宿過ぎて宇都の宿に来たり見れば、今日は所の祭りにて人おびただしく集れり。ここに明日より歌舞伎すとて、役者、子供、馬に乗り並びて来るに会えり。川尻の宿に七つの頃着きぬ。ここも祭りにて人おびただし。木村源兵衛宿に泊りぬ。夜に入りて亭主源兵衛祭礼なればとて、濁酒出してもてなしぬ。語るにここも、芝居明日より始むるとて太鼓を打ちて通るに、

旅人もござれござれぢや秋芝居

廿日　朝晴午後曇

朝六つ過ぎ川尻の宿を立ちて熊本城下に来たり。藤崎の宮に詣でて拝礼し奉りぬ。伝え聞きしより尊くまします。古き絵馬に寛永の年号あり。矢野三郎兵衛といえる人の書きしとかや、河津の相撲、羅生門、草摺引三つなり。宮廻りして下向して植木の宿に急ぎ着きぬ。それよりはるばる来るに少し下る坂あり。側に大きなる桜の木の根に清水あり。去りし年参宮せし時、堪え難き暑さにこの水にて口そそぎせし事を思い出でて、

立ち寄りし木陰の清水今もなおすめる心は変わらざりけり

遠く山々見渡さる中にも、阿蘇の嶽は変わらぬ烟立ち覆いて侍るに、

吹く風に雲こそ消えね神代より立たぬ烟の立つにまかせて

それよりやがて山鹿の宿に着きぬ。問屋薩摩屋新兵衛、今日四つ前熊本馬次にて、御国元へ御使として井手籠十兵衛殿、葛田彦右衛門殿通られけるに逢いて、事なく通るよし言伝えしやりぬ。

二十一日　曇天小雨降

山鹿の宿を出でしはまだ東雲なり。南の関に行きかかりて、少し坂を下る野に大きなる松のあり、下に小さき家あり。隣りとてもなく、茅葺きの上に落葉降り積りて、幾重ともなきを見て、

常にしも落葉積りて草の庵は名のみに住める松の下陰

かくて原の町、瀬高なんどいえる里々打ち過ぎて、七つの頃に宿の町に着きぬ。薩摩の問屋角市郎右衛門宿。

二十二日　晴天

亭主角市郎右衛門、子佐右衛門は、去りし年於須磨の御方往来の御宿にて知人なり。誂道に志ある者にて今なおこの道を捨てず。宵の内閑談せしに、先年申せし久留米の点者佐越殿の誂道にすかせ給い、普くはやり

けれども、家老の人々学文を第一に歌、連歌などなさせ給え、閑ある時々誂も翫わせ給えと申すに依りて、今はすたれぬばかりなりと語りぬ。この佐越殿より翁の号給うべくとて、自分載翁と改めたりと巻二つ予に与えぬ。夜明けて宿を出でて府中高良の明神伏し拝み松崎に着きぬ。ここは去りし年五月雨降り続きて十日の滞りありて、清蔵といえる者の宿に居りぬ。今日立ち寄り見るによく見覚えて何くれと語るに、その時いとけなりし子供もはや生い立ちて、家内変わる事侍らずと語る。この宿の出はずれに霊鷲寺といえる五山派の寺あり。去りし年三十三体の観世音を画きて寺僧に与えて、人に付属し候らえと頼みけるが、今は弟子の僧に寺を譲りて隠居して寺の内にある由語りぬ。やがてここを出て山家に七つの頃ほい着きぬ。宿は薩摩屋弥助なり。夜に入りて茶点てて呑みけるに弥助を呼びて呑ませけるに、田舎者の心から只富貴ならん事のみ思うと見えて、この少しも志ある体に見えねば、狂歌

知らずしてよほど損茶（ぢや）を呑ませけり

山家の弥助野人なるばに

二十三日　朝小雨降午後属晴

明けはなれて山家を立ちて、冷水越にかかりけるに、小雨降りて霧深かりければ、

見る内に麓は暮れて高根行く道一筋に残る秋霧

岩間行く音はさやかに雨くらき霧の底なる谷川の水

それより内野に下りけるに、雨も晴れて飯塚に来りぬ。ここに松平信濃守殿御泊りなりとてもてざわざわ。やがて過ぎ行くに、小竹の茶屋に暫く休み末遠く見渡せば、堤伝いかろうじて船渡しの川岸に小家のあるに、駕籠たてて小竹にて遅れし人々を待ち候て、火どもともし漸く五つ前つかた、木屋の瀬問屋紙屋石橋甚三郎が宿に泊りぬ。

九月廿四日　晴天

木屋の瀬宿紙屋石橋甚三郎なり。夜明けて宿を立ち黒崎に来りける。江戸へ参る唐の犬、猿、小鳥共籠に入れておびただしく持て行く。今日は松平信州御通り路とてさわぐ事おびただし。かくて小倉に着きぬ。村屋新蔵が家に休みて夕飯食い候て、船よそい仕舞いければ、やがて船に乗りぬ。その夜はここに居りぬ。

二十五日　晴天

朝の間、ここの古道具店ども見物して、やがて船に乗りぬ。午の刻ばかりに船を押し出して下之関（下関）に着きぬ。ここの阿弥陀寺に参りて絵解きども聞きて、寺僧に問いけるは、長門本とて平家物語あなるが、世に行わるる本にて異なる事多き由伝え聞き侍る。則ちこの寺に侍るやと言いしに、さなり二十巻侍る。男の書かる、女の書かる、幼童などの手ぶりにて書かる、真字、仮名、様々に侍る。月日を付けてある由語りぬ。この寺去りし年焼失して今は本堂ばかり残りて、天皇の御影堂わずかにしつらいたるばかりなれば、蔵とてもなし。かの本も余所に預けて侍れば、開帳叶わずと言う。ただ見廻りてやがて出でて町を通るに、昨日小倉に着せし時、村屋がもとにて松平信州の御通りを見たるが、大里よりここに渡させ給いて宿をさせ給う。供人、人の様はた賑わしく侍り。

二十六日　曇天午後属晴

今日も下之関に居りぬ。飯後町の下の方見廻るべしとて権八同道して行くに、高き所に寺あり。詣でて見るに観世音、薬師おわしまして小寺二間なり。興禅庵といえるは黄檗宗なり。子供もあまた侍りて手習うあり。茶ども立て呑み居るに住僧帰り来りて、寿国寺の事、琉僧洞天などの事

語り出して暫し休みぬ。やがて船に乗りて安全のために模写したる三十三体の観世音、菩薩の尊像成就し奉りぬ。

二十七日　天顔快晴

下之関船の内いぶせくて、長府見に参るべしとて三人打ちつれ行きぬ。二之宮と聞ゆるに詣でて、住吉明神にて渡らせ給うというに暫し拝み奉り、かしここ見廻りて鳥居の側なる家に休らい、物食い、酒呑みて立ち出でぬ。ざれごと歌よめる、

おさな子の旅の別れはさんわさわ
とうふちょうふの吸物を喰いて

帰る道に、松に蔦のかずら生え上がりたり、いまだ色にもまだ出ず。

色薄くまだ下染の蔦かずら時雨をいつと松にかくれる

長府の真言宗に修善寺というあり。参りて見るにいと尊く、鑁智といえる小僧案内して、本堂、護摩堂、客殿の本尊まで拝み廻りぬ。茶たぶえて出でぬるに曹洞宗の寺あり、金山功山寺というういと古き寺なり。庭の樹物ふりて、ことに本堂の前に柏樹、たぐいなく覚ゆ。暫し見廻りて道の遠ければ急ぎ下之関に帰えりぬ。功山寺大門の額、海宇第一峯とあり。何人の筆跡とも知れず、この寺開基の時よりある由、甚だ古き物なり。

安き代は往来の船も道ありて学ぶ甲斐ある文字の関守

二十八日　快晴

三人打ちつれて興禅庵にまからんとて行きぬ。ここ静かなれば何くれと語るに、主の僧掛け物、巻物共出して見せぬ、法類の由にて。この国の生まれなる僧長崎に三年侍りて、今度大坂に上る由にて、昨夕べ着たる。侍り渡りし虎の噂など聞きぬ。やがて食物ども出してもてはやしぬ。七つの頃船に帰来して一礼申し遣わしぬ。主の僧の名は孝先といえり、生国は近江の人なる由。小僧侍るが十三四にて同じ国の生れなり、名は印光といえり。

廿九日　快晴

今日も下之関に居りぬ。船の内さびしく、なす事もなく、茶など呑みて観世音の尊像また始め奉る。守成すすめで暮秋の歌詠むべしとて詠める。

海辺暮秋

置くものは何をかたみの色もなき浦はの波に秋の行くらん
追手をば待つに日数は秋暮れぬ文字の浦風心して吹け　元春
きのふかも松吹く風にこし秋の残るともなく暮るる浦波　守成

晦日　天顔快晴

昨夜九つ時分下之関を船出し、西風吹き出し帆を掛け、やがて凪になりぬ。櫓を立て押しける、四国の山々はるかに見えたり。今日は九月尽なれば、

今日のみの秋の名残りを和田の原
波に入る日のかげおしぞ思う

海士人の引き手に留る秋ならでおしむ日数も波のうけ縄

夜の内櫓を立てて漕ぎ行くに、上之関を二里ばかり跡になして明けぬ。

十月朔日　晴天

朝の間は風ありて行くに、やがて凪になりぬ。沖のかむろという所のこなたにはなれたる村あり。ここに汐がかりして陸に上がり見るに、人家の様いといぶせく、濱の方に松のあるもとに元春、権八共に休らいて、船より茶の具取り寄せて点てて呑みぬ。水ども取りてやがてここを船出して行くに、西の追い風吹き出して島々後へ走るが如し。七つの頃ほい吹き止みて、つわという所に船がかりしておりぬ。暫く追手吹きしが、

やがて東風の雨まぜになりて、日合惜しくとて夜に入るまで櫓を押して、安藝の内かろと（鹿老渡）という所に入りぬ。里の海士の焚く火影ども見えたり。ざれごと歌

夜船をもつながばここによつろうと海士の灯火しるべにはしつ

二日　雨天

まだ明けやらず夜を込めて、やがて帆を揚げ行くに、風激しく雨まぜになりて、人家もなき泊に船を入れぬ。それより雨風激しくて船の内いといぶせかりけるが、ここを亀の首という。この五文字を折り入れて

かくばかり珍らしと思う野も山も暮るるも秋の日こそ長けれ

かりてのみめをつむ小屋の軒をあらみ苦しきわざも人や馴れぬる

やがて雨止みて、日の暮るる頃帆を揚げて走り行くに、風も心にくからず櫓を立てて、夜入りて御手洗の湊に入ぬ。

三日　晴天

順風なくて、徒然なるままに陸に上がりて、観世音のまします堂あり、南湖山という額あり。僧に問いけるに行基菩薩の作にて常には開帳せざる由語りぬ。かくて今船のかかりたる所は波入り来りて船の揺るぎ大かたならず、やがて奥の方に入りぬ。それより、また陸に上がりて、さし出たる家あり、前に夷の宮おわします。そば切り打せて食い、酒呑みて船に帰りぬ。船頭のいえるは日並みなし、この夷の宮に日より申さんと船ども申し合わせしと語る。初穂参らせんとて上げるに、やがて太鼓の音聞こえて神楽奏すらんと覚ゆるに、船頭帰りて御託に明日、あさっては日和なし、五日よりはよき日並みになると告げさせ給う由語る。この夷の宮はもと小倉よりここに来らせ給うが、小倉の船の申す事をよく聞かせ給うとかや。

故郷を忘もやらで祢ぎことを頼むひる子の神や祭らん

夜に入りてやがて、近く繋ぎたる船に鎧、長刀立てたるあり。船人に問えば、伊勢の人なるが讃岐の金比羅に詣でて帰るなり、五十ばかりなる男の妻子多く連れたるなり。その子の内に年十三四ばかりもやと思うが歌いて、三味線をひく。また隣りの船には何事やらん事々敷く罵りて、いさかう声止まず、こゝら集まれる船なれば、耳かまびすしく侍り。この湊二十年ばかりこのかた、かく賑わらしくなりて、遊女のたぐいまでも集まりぬ。

四日　曇天　午後属晴

四つの頃ほい船を出し、帆を揚げ暫し走りもて行くに、やがて凪になりて櫓を立てて押しぬれば、鼻ぐりの瀬戸（鼻繰瀬戸）汐よくて左右の山々佳景なり。中にも右の方の島山は嶺より水出ると見えて、日の光りに白く見ゆるあまたあり。なお漕ぎ行くに、いわき（岩城）といえる泊の前に船を休めたるに、女の年老いたるが二人七つになる子を乗せて魚売りに来たり。年老たる女は目ただれて赤く、色々口ききて物いい、魚買い取りて、ざれごと歌

むだ口に何をいわきの海士の女も赤目はりてや世話をやくらん

浦の名の岩木にあらぬ契りかも魚はひら目にそちはただれ目

それより凪になりて、いと静かなる空に鶴の連なりて渡るが二つれ見えたり、鳴声も聞ゆ。

夕汐を待つ間久しき湊江になおさして行く田鶴ぞ鳴くなる

夕張月の波にかたぶき、山の端に入る景色えもいわれず。夜に入りて船を押し出し備後のともにかゝりぬ。

五日　晴天

日の出る頃船を押し出して、やがて帆を揚げ走り行くに、やがて凪になりぬ。小さき島多く見ゆるに鴨の群れ居るあり。

漕ぐ船の梶音なくて何にかはさわぎも立たん波のおし鴨

人けなき島根の波の静けさに安くも眠る鴨の群鳥

昼の内は凪て櫓を立てて押し行くに、七つの頃より西の風吹き出して走り行く。日の暮るる頃ほい下つゐ（下津井）に来りぬ。夜に入りても風強くて、暁がたに牛窓の湊上の方に船を泊めぬ。

六日　曇天午後半晴

朝の間は東風吹き出して、船をここにつなぎ居りぬ。それより帆を揚げて行くに、風あい心のままならず。七つの頃ほい備前のたぶという所に船を入れぬ。陸に風呂立てて竹の筒吹く音聞こゆ。やがて上がりて風呂に入りぬ。ここの様、家居瓦葺き渡し、余所目はにぎにぎしけれども物さびたる住居なり。所の押さえという人岩田喜兵衛と聞こゆるが、妻子までも引き連れてある由語りぬ。風呂立てたる主に、ここに酒はありやと問えば、上方より下りて侍るというに、さらばとて船に乗りて取り寄せて呑むに、心よからねど呑みぬ。夜に入りてざれごと歌

あすよりは真帆に追手の西風を

吹かせてこうと人はいうなり

七日　晴天

夜の内より船を出して、追風吹き続きて姫路の城なんど見えたり。それより続きて高砂の浦はるばる遠く見渡さる。でふの濱人家多く、やがて二見という浦も続きたり。

どうなりと趣向をでふの濱つたいやがて二見の浦となりぬる

追風なおなお心よく吹き続きて山々も遠く見ゆるに、

播磨潟真帆の追風吹き続く山も都にほど近く見ゆ

二見の濱人家多く立ち続きて、上二見、下二見とてあなるが、その間に千秋楽という濱あり。それより明石の浦近く見えて、往来の人の有様までもさやかに見えたり。須磨の浦つたい真砂地近く船をやりて、追風心よく吹き続き佳景いわんかたなし。日の暮れはてて和田の岬漕ぎ廻り、夜に入りて神戸という所の前に船を泊めぬ。

八日　晴天

まだ夜の内に船を出して漕ぎ行くに、波高く風心よからず。やがて帆を揚げて西の宮の前にて夜明けぬ。摂津の方も見渡さる、それより櫓を立てて行くに、やがて大坂に着きぬる。宿は御屋敷亭の下長屋なり。御国元よりこの間御使いに通る便りに文来たりぬ。九月廿一日の書なり。

九日　晴天

大坂へ滞在、川上瀬兵衛殿今朝下着にて旅宿へ立ち寄られ候。やがて御屋敷へ大野清右衛門殿、伊集院仁左衛門殿所へ見舞い候て、暫し咄申し候て罷帰り候。夜入る時分堀涯に歩行申し候処、非人浄瑠璃を語り通り候て、近藤三左衛門隣家につと立ち寄り候て、何ぞ下されといいしに、何やらんめんつうに入り候。いただき候て二三間行く行くずっと呑みて心よげに、これではもう一段語らねばならぬという独り言聞くにおかしく、

心から成せばなり行く果しらで迷いながらの身や安くある

今宵月清明、川上瀬兵衛殿旅宿へ見舞い候えば、中江弥左衛門殿、山下次左衛門殿居合いなされ候て得と咄罷居り候。五つ過ぎに宿へ帰り候。

十日　晴天

今日は豊竹若太夫浄瑠璃聞きに参り候処に、芝居大込みにて見物ならず

徒らになり、直ちにに新清水へ参詣、生満生玉見物、御城辺迄通り候て帰宿。七つ時大野清右衛門殿振る舞いにて、大坂名物の平野屋所持の雪舟巣烏、一本菊、その意を得ず。その外百幅余りの掛け物見物、慰目の至りなり。夜入り四つ時分帰宿、今夜入り候て江戸より御使い参られ候て、書状またまた相調え頼み遣わし候。

十一日　晴天　晩来雨降

今朝四つ前川船に乗り候て罷登り候。この川船は河野八郎左衛門殿下りに付きて、迎え船伏見へ参り候故、幸便故相渡り候。ゆるゆるこれあり諸方の遠見、慰目候。

淀川や船引く人の行くままに岸つたいする水の白鷺

岸につらる人家、別けてむさき里あり。この住居にても世はあじきなき物と見え候故、

うきにのみたえてをいかにこの里の

余所目ばかりもゆかしからぬを

平かた（枚方）参り候えば夜入り候故、船を掛け候に夜半迄は雨頻りに降り候。

日数えて浮ねに馴れし旅ながら雨にいぶせき淀の川船

十二日　半天（晴）

夜明け候て船を出し、追付橋本へ参り候。元春、権八は八幡へ参詣致され候。淀の橋通り候て茶屋のこれある前に船を留め、両人を待ち居り候に、前は限りもなき末遠き芦原にて、水鳥の声おびただしく聞こえ候、

群れている声は聞こえて水鳥のありか隔てる芦の群立ち

やがて両人帰参候故、船を出し伏見へ着き候えば、河野八郎左衛門殿只今着にて、旅宿へ参り候て相見え候。直ちに船より荷を付け出し、京都へ夜入り候て参着申し候。則堀万右衛門殿当奉行候故、待ち受けの料理振る舞われ候。旅宿へ罷帰り候えば、権八兄能勢五郎兵衛殿、志賀武兵衛殿、万右衛門殿見舞いにて咄申され候。

（寅十月）十三日　雨天

昨夜着以後雨降り出し、今日終日止まず。

十四日　曇天

今日御屋敷中にて咄罷在り候。夜入り月明。

十五日　曇天

今日四人の御呉服所見廻われ、藤本彦右衛門等入来、終日客来たる。

十六日　雨降

今日在宿、朝の間書状調え、大坂伊集院仁左衛門殿乗船明十七日立ちによつて、大津屋仲兵衛へ頼み町便に遣わし候。終日客来る。

十七日　小雨降晩来属晴

今日殿下へ上京仕り候段、堀万右衛門殿同道にて参上仕り申し上げ候。則村井右膳殿出合われ候。何か対談にて、追付諸大夫衆斎藤大蔵殿出合われ候て、私へ殿下より御諚の趣、先ず以て御国元御安全、入道様、於須磨様弥御堅固御座なさるべくと御尋ね、並びに下拙事、このたび御用筋御頼み遊ばされ候処、上京仕り候段太儀に思し召し上げられ候。段々御用仰せ付けらるべきとの御事にて、追付御吸物出、三重の御取肴、御酒下され候。この節の御用筋に付きて村井右膳殿より承られ候に付、絵様何かの対談仕り、則申し上げられ候て相極め候て、やがて退出仕り候。帰路藤本彦右衛門宅へ万右衛門殿相招き候付、同道にて直ちに参り候。やがて御屋敷より冨田清六殿、押川六左衛門殿、能勢五郎兵衛殿、木場源五兵衛殿参られ候。段々馳走なり、相伴は道昌庵承順法眼にて候。舞

妓みな鶴御前、小伝など申し、段々芸これあり候。その外浄瑠璃、舞数刻に及び候。夜更け罷帰り候。皆々同道、帰路月明かし、昼の如し。

十八日　晴天

清水観音参詣、先ず祇園へ参り見物致し、夫より清水へ参詣、船中において書写奉る観世音の像六十六体、番の僧に頼み置き候。巡見仕り候て高台寺、雙林寺、長楽寺見物、帰路二間茶屋にて田楽、酒下され、日暮れ前御屋敷へ罷帰り候。

十九日　晴天

今日清興院見舞われ候。藤本母同道、於須磨様より御伝言相達し候。西行の巻物受け取られ候、御国元にて殿下へ志し奉り美人蕉の花持ち上がり候。色相変わり候えども御覧に備えられ、然るべく思し召し候わば、貴尼へ進め申すべく候間、御了簡次第と申し候て進上申し候。則このままにて御覧に入るべき旨申され持たせ候。夜入り道昌庵入来数刻閑談、堀万右衛門殿も入来、木場源五兵衛殿も参られ候。深更に及ぶ。今夜月明。

廿日　晴天

今朝霜初めて降り、昼時分より白川遍淳比丘へ御見廻り申し入れ候処、霊空和尚へ御見廻りにて留守故、侍衆禅外に取り合い、暫く閑談に及び候。帰路知恩院の境内見物申し候て二間茶屋へ出、豆腐下され候。折節時雨降り候て祇園林の木葉散り候。佳景申すばかり候。追付晴れ候て罷帰り候。

廿一日　曇天

二十二日　曇天

今日より御屏風の下書き紙出来候故、御座に罷出候。遍淳比丘より禅外使僧に下され候。夜入り候て堀万右衛門殿、冨田清六殿咄に出られ、茶話に及び候。

二十三日　半天（晴）

今日殿下へ参上仕るべき旨、兼て村井右膳殿より申し来り候。今朝また手紙にて八つ半時分伺公仕るべき旨申し来り候に付、堀万右衛門殿同道にて罷上り候。村井右膳殿出合われ候。殿下へ唐筆一箱、石本一帖、印石入り一箱進上仕り候。准后様へ唐筆一箱、石本一帖進上仕り候。准后の御方へは右膳殿御取りなしを以て頼み奉る由申し上げ置き候。兼て於須磨様より御願い仰せ上げられ候西行の巻物御覧候えば、文章と絵混乱申し候故、見分け申すべき由御諚の旨承り候に付、則見分け差し上げ申し候。追付御吸物出、御酒下され候処、只今御目見仰せ付られ候間、罷出候様にとの事にて先ず万右衛門殿出られ候。奥御書院にて候、御諚、このたび探元上つたに付けて何か世話であらう。追々私御目見、村井右膳殿奏者にて木村探元と披露、久しうて逢うた、国元でも入道、須磨無事ぢやげな、このたび無心をいうに、はるばる上つて苦労な事ぢや。御次の間に諸太夫斎藤大蔵殿下がり申され候て、珍しき品々進上候て御満足遊ばされ候。この段申せとの御事にて候由承知仕り候。左候て元の座に罷帰り候処に渡部求馬殿出合われ候て、久々に逢い候由申され候。准后の御方へ相勉められ候えども、今日ここへ参り候えば私参上仕り候由聞かれ候て待ち居り候由なり。追付藤谷兵庫殿出合われ候て、久々に逢い候由にて盃取かわし候。何か心安く対談申し候て暮れ前退出仕り候。誠に誠に冥加の至りなり。夜入り宿にて祝候て、能勢五郎兵衛兄弟、元春へ吸物にて祝申し候。追付堀万右衛門殿へ名酒千鳥瀧一樽持たせ申し候て今日の祝申し入れ候。咄衆伊集院次太夫殿、木場源五兵衛殿、能勢

五郎兵衛殿にて候。深更に及び罷帰られ候。

廿四日　半晴

今日相勤め候て、八つ後壬生の地蔵へ元春、権八同道にて参詣申し候。直ちに本国寺見物、因幡薬師、仏光寺迄も巡見申し候。薬師堂に俳諧発句これあり面白く候。

十徳や世話の仕業を軒の蔦

夜入る前帰宿申し候。

廿五日　晴天

今朝霜降り雪の如し。昼前堀万右衛門殿同道にて近衛様へ、この間御目見仰せ付られ、ありがたく御諚を蒙り候故、御玄関迄参上仕り申し上げ置き候。万右衛門殿は遊行上人へ兼約これあり、私事は薬師山清江院へ見舞い候故、殿下において相分かれ候。清江院にて飯振る舞われ、弟子の尼大徳寺へ参られ候て案内頼み候故、芳春院探幽筆の座敷、大僊院古法眼雅楽之介の座敷、真珠庵一休和尚の御影、曽我蛇足座敷見物致し候。大仙院は庭の立石往昔相阿弥の作なり。いわゆる不動石、観音石、釣船石相は廊に出、破風これありてその下にある故という。案内は芳春院の小僧天蔵司なり。元春、権八歩行にて遅く、私事は夜入る前帰宿申し候。

廿六日　晴天

今日御屏風下絵相調え、終日相勤め候。夜入る前堀万右衛門殿入来にて閑談に及び候。今昼後御国元よりの書状相達し候。

廿七日　晴天

朝五つ時分、越後屋市郎左衛門案内にて、誓願寺内竹林院古織の茶室見物、図相調え候。直ちに高台寺見物、傘庵、並びに亭、太閤の御影その外座敷残らず奇麗なり。庭前の楓葉錦の如し。小遠の作茶室あり。池中の立石利休居士、真に奇観なり。帰路祇園の辺り借り座敷にて越後屋父子より馳走に及び候。同伴いわゆる堀万右衛門殿、押川六左衛門殿、伊集院次太夫殿、能勢五郎兵衛殿兄弟、押川元春なり。

廿八日　晴天

今日終日御屏風下書き相調え候。昼時分大坂より大野清右衛門殿上京にて、万右衛門殿宅にて振る舞いこれあり相伴致し候。夜入り候て、私宅へ咄相催し申すべき由約束致し、夜入り清右衛門殿、万右衛門殿入来にて、炉辺閑談におよび候。

廿九日　晴天暖気

今日終日下絵相勤め候。近衛様より御屏風の清書紙並びに仮張り等持たせられ候。加治掃部殿、村井右膳殿手紙なり。今朝遍詢僧正より手紙にて、江州納豆十把、煎茶両品贈られ候。

十一月朔日　晴天

今朝終日相勤め候。昼大野清右衛門殿大坂へ帰られ候に付、堀万右衛門殿宅にて暇乞い仕り候。晩来権八同道申し候て四條通り迄歩行申し候。夜入り帰宿申し候。川元市左衛門殿宅へ一刻立ち寄り咄申し候。

二日　晴天

今日終日下書き相勤め、夕飯後権八同道にて寺町本能寺見物、義久公御簾中様御石塔拝み候。元亀三年の年号あり。信長公御石塔天正二年の年号あり。帰路押小路古物見物、暮れ候て罷帰り候。

三日　晴天

今日終日下絵相調え候。元春、権八事東福寺へ宝物の絵共見物に遣わし候。兼て即宗院殿へ堀万右衛門殿を以て一見の願い申し入れ置き候えども、役衆中相切り封にて容易に罷ならざる趣承置候処、当日二条所司代

御巡見によつて宝物共出置き候間、今日私にも参るべき由候えども、下書きに取りかかり候故その儀能わず、右の式なり。

四日　朝曇り午後属晴

今朝下書き近衛様へ持参仕り候て、村井右膳殿を以て差し上げ候えと、御覧遊ばされ候ての儀と申し上げ候て、直ちに高尾山へ赴き候。兼約に依りて堀氏、押川六左衛門殿、能勢五郎兵衛殿、元春、権八仁和寺の茶屋へ待ち居られ候。参り候て朝寒く候故、酒、田楽など食べ候て、それより歩行にて皆々高雄へ向け参り候。道路興ありて高雄へ参り候えば、紅葉最中にて佳景申し無くばかり候。堂々巡見候て地蔵院見物驚目候。左候て門前の茶店へ休み候て弁当開き候。堀氏の馳走に御座候。拙子茶箱開き候。興趣申し尽くし難き状、それより槇之尾、栂之尾見物、明恵上人の像、善財童子、狗子、皆々奇宝なり。山中巡見申し候て、帰路夜に入り罷帰り候。今日道傍に宅間法眼の墓所あり、往昔明恵上人に約ありて世人知る所なり。高雄にて迎接院へ立ち寄り候て庭の紅葉見物、楓枝三つ恵まれ候。白川遍詢の御弟子当寺の恵龍と申すへ付け状これあり候故かくのごとく候。恵龍は出京にて寺僧挨拶なり。

五日　晴天

今日は東福寺即宗院殿へ兼約これあり、参る筈に堀万右衛門殿申し合わせ置き候処、御所より召し呼ばれ候に付て則参上仕り候えば、御覧に備え置き候御屏風の下書き皆々御褒美にて、少々御好みこれあり清書仕るべき由仰付られ候。加治掃部殿出られ候て、この節はいまだよく面談なく何か咄仕り候。御吸物、御酒下され候て退出申し候。御屋敷において、瀬尾新次郎糸荷作りの弁当振る舞い候て堀氏にて相伴申し候。夜入り宿屋長七夜食持参にてゆるゆる咄候。

六日　晴天

今日清書の紙皆々仮張りにのせ候。夕飯後歩行として権八同道にて祇園近く参り候。御灯の光り面白く巡見申し候て、二間茶屋腰掛けに参り候て歌よみ候女これあり。何ぞ詠め候哉と尋ね候えば、

紅葉　山姫の心の限り染め尽す思いの色も深き紅葉葉

夜入り帰り申し候に、直ちに堀氏へ咄申し候。同座の木場源五兵衛殿、また直ちに川元市左衛門殿宅へ立ち寄り、暫し咄候。元春並びに権八居合わせ候。

七日　雨天

堀氏高雄の紅葉枝持ち帰えられ候処に、小姓共心得ちがいに候て葉をことごとくむしり取り候故、この方の枝持たせ遣わし申し候。

風なくて散るもはかなし同じ枝のこなたに残る紅葉を見よ

返し

同じ枝の残る恵みを愛でしにぞあだなる風の恨みをそそう

川元市左衛門殿よりも一枝所望によりて遣わし候えば歌遣わされ候、

手折りくる人の心の高雄山紅葉にまさる錦ならまし

大坂言葉のなまり

やりぬくい大けな事を御ふれまい

またもじるいにぬかんなりけり

今日終日御屏風の絵清書仕り候。田中甲治糸荷作りの弁当万右衛門殿宅にて相伴申し候。曇天にて雨は降らず少々霧雨にて、暮天に及び。

八日　晴天暖気

今日終日清書相勤め候。昼時分能勢五郎兵衛殿大坂より帰京、大坂より御国元書状参り候由にて持ち越し給い候。先月廿一日付の状にて候。八

つ過ぎおとわ母子見廻、暫し居られ候て罷帰られ候。

九日　曇天

今日清書仕掛かり罷あり候処、近衛様より加治掃部殿、村井右膳殿より御諚の趣にて書き付け、寒気の節清書最中仕り大儀に思し召し上げられ候由御尋ね、御肴鯛二枚拝領仰せ付けられ候。使いの人へたばこ盆出し候て薄茶出し申し候。御請け御礼は追付参上仕り申し上ぐべく候て、やがて御所へ罷上り村井右膳殿へ取り合い候て、冥加の至り存じ奉り候由御礼申し上げ候。則退出仕り今出川通りより寺町の頭へ出候て罷帰り候。夜入り堀万右衛門殿、冨田清六殿、能勢五郎兵衛殿、同権八・元春寄り合い候て祝仕り候て、ゆるゆる咄申し候。右の御肴拝領の書き付けこれあり。

十日　晴天

今日終日清書取り掛かり罷在り候。

十一日　晴天　同断

十二日　曇天　同断

十三日　曇天　同断

十四日　曇天　同断

十五日　晴天

今朝巳の刻御用これあり候間、堀万右衛門殿同道にて御所へ罷上がり候様にと村井右膳殿より申し来り、則罷上がり候処、私官位仰せ付けらる筈に思し召し上げられ候。小折紙と申すに御執奏の趣御書き付け相調え、また半切に法橋御願の趣書き付けこれあり、万右衛門殿私へ右膳殿より拝見仕り候様にとの事に候。左候て則傳奏衆職事へ右膳殿同道にて私召し列なり候様にと仰せ付けられ候間、万右衛門殿事は勝手次第御暇これあり候様にとの事にて、追付退出にて候。やがて右膳殿同道にて葉室大納言殿へ参り候て、右の半切紙に書き調え候を雑掌衆へ相渡され、関白様御口上申し入れられ候。先日申し入れ候探元法橋なるの儀職事へ申し出候間、聞し召さるべく候との趣なり。やがて罷立ち廣橋弁殿へ参り候て、雑掌衆に出合わされ候て、小折紙を出し関白様御口上右同断にて、小折紙差し上げられ候。追付御逢いなさるべく候間、右膳罷通り候様にとの御事にて参られ候。私事はさ無く、使者の間に罷居り候。それよりまたまた近衛様へ罷帰り候て、冥加の次第に存じ奉り候由御礼申し上げ候処、右膳殿を以て今日御執奏遊ばされ候間、近日勅許仰せ付けらるべく候。めでたく思し召し上げられ候由御諚承知仕り候。罷帰り候て清書に取り掛かり申し候。冨田清六殿より夕飯振る舞い申すべき旨、兼約により元春、権八同前参り候て馳走に及び候。九つ前罷帰り候。

十六日　晴天

今日終日清書相調え候。夜入り候て堀氏咄に出られ候て閑談を得候。四つ過ぎ罷帰られ候。

十七日　曇天冷気甚

今日終日清書相調え候。夜入り燈下において国元へ書状相調え候。

十八日　晴天

今日終日清書相勤め候。昼の内堀万右衛門殿へ平松侍従様御婚礼の由にて赤飯遣わされ候故、絵書所において賞味致し候に付、

婚礼は始終よかろう石黒の動かぬために送るせき飯

早速ざれごと歌申し候。平松殿雑掌を石黒大膳と申し候。さて赤飯下され候て清水観世音へ参詣致し候。御燈の影あまた、佳景申し尽くし難く候。御屋敷へ罷帰り候て権八同道仕り、直ちに立ち寄り候えと申し付け

候付、吸物、酒出し、暫時咄罷在り候。

十九日　晴天

今日終日清書相調え候。八つ後岩松勘兵衛殿大坂へ罷帰られ候故、大野清右衛門殿へ二対掛け物料頼み遣わし申し候。また経師嘉兵衛方松花堂公家衆の反故、権八差し越し候て皆々相済むなり。今日南泉院後住江戸より着にて、当御屋敷へ罷居られ候。堀氏振る舞いこれあり候故、かの席相済み申し候て、以後、堀氏へ約により精進料理給い候。夜入り権八咄に来り候。

廿日　晴天

今朝殊更霜降る。終日清書に相掛かり候。夜入り四つ過ぎよりしきりに時雨降る。

廿一日　晴天晩来時雨

今日終日清書に相掛かり候。夜入り堀氏咄に出られ候て、小姓長谷川弥平次へ点前指南にて一興候。帰られ候節音羽山より月出て候て奇観なり。音羽の峯に出る半月と明石の歌物語これあり候。この景なりとて一笑申し候。三更に及び明月。

廿二日　晴天午後曇

今日も終日清書に取り掛かり候。堀氏より菜飯振る舞われ候て、暮れ時分よりかの方へ咄候。元春、権八同前。夜入り候て、廻り点前にて茶下され候。夜入り清明。

廿三日　晴天

終日に清書に相掛かり候。

廿四日　晴天

終日清書に相掛かり候。晩来冨田清六殿風呂立てられ候て入りに参り候。夜入り候てこの方へ清六殿、能勢五郎兵衛殿、川元市左衛門殿、山下雲洞咄申し候。

廿五日　曇天

今日も終日清書、夜入り候て南泉院家へ堀氏同道にて咄に参り候えとの事にて参り候、段々馳走に及び候。四つ時帰宿、やがて木場源五兵衛殿入来にて候、閑談致し候。高雄山へ茶持参候て、則席挽かさせ候て賞味致し候えば、別て香り候なり。今日院家平松殿へ初めて参上。なお、この契約相調え候由咄承り候。四つ過ぎより降雨。

廿六日　半天（晴）

終日清書に相掛かり候。志賀武兵衛殿見舞い閑話を得候。夜入り武兵衛殿同道にて咄に罷出候。

廿七日　曇天

今日暫し清書に相掛かり候。米良孝右衛門殿御国元より御使者として江戸へ通らせられ候。序でに遍詢僧正へ入道様より御使いの趣これあり候に付立ち寄られ候て、料理相調え振る舞い申し候。堀万右衛門殿も相伴御相頼み申し候。ゆるゆる咄罷在り候処、近衛様より村井右膳殿手紙到来、法橋勅許今晩にてこれあるべく候間、早々罷上り候様にとの事にて則罷上り候処、右膳殿出合われ候て、追付御湯漬下され御酒出申し候て、四つ前に罷なり廣橋弁殿御出、追付退出にて候。左候て右膳殿申され候は、只今弁殿より到来これあり候。かの御方へ同道申し候て罷出候様にと仰せ付けられ候由にて、右膳殿相伴罷出候えば、先ず右膳殿罷出られ候様にとの事にて罷出られ、やがて私事罷出候えとこれあり罷出候えば、廣橋殿白むくに上の袴ばかりにて、今日法橋勅許にて候、めでたき事に候。左候て宣旨も弥申し請けられ候哉との御言、則右膳殿申され候えば、

弥以て頂戴仕るべく候と申し上げられ候。御席下り申し候節、めでたき仕合わせの由弁殿仰せられ候。追付かの方の雑掌相対に進上物、または御礼の次第、右膳殿相談申され候。暫し隙とり申し候。退出候の砌門外において、関白様へ御直に御礼に罷上るべき由右膳殿へ申し候えば、深更に及び候間、必ず明朝罷上り候えと申され候故直ちに罷帰り申し候。尤も廣橋殿にて取り次ぎ次第の儀、雑掌衆藤本左近と申す人にて候。追付帰宿申し候処、米良殿、堀殿この方へ咄候て待ち居られ候故、右の段々申し達しめでたき事の由にて祝申し候。藤右衛門殿便に、田原友助大坂へ米船上乗りにて参り合わせ候て、京見物に罷上り、同道にて参会申し候。

廿八日　晴天

今朝五つ時近衛様へ御礼に罷り上がり申し候。村井右膳殿出られ候故、先ず以て御執奏故、法橋勅許の段冥加至極に存じ奉り候。御礼宜しく御取りなし頼み奉り候由申し上げ候。則達口御聞き候て御口上、法橋勅許の段、めでたく思し召し上げられ候由、追付近藤大蔵殿、加治掃部殿出合われ候て勅許の祝言承り申し候て、追付退出仕り候。罷帰り候て米良殿、堀氏同道にて押小路古物見物に参り候。米良殿大耳の釜取らせられ候。左候て越後屋市左衛門方へ立ち寄り候て茶立て申し候。吸物等出候て取り持ち申し候。市左衛門案内にて誓願寺の竹林院小座見物、米良殿へさせ申し候。直ちに遍詢殿へ藤右衛門殿は越させられ候故、万右衛門殿同道にて罷帰り候。友助事は藤右衛門殿へ相付き候て白川へ参り候。

廿九日　晴天

今朝堀氏より米良氏へ朝振る舞いにて、元春同じく相伴申し候。御用の絵も見物にて候。追付米良殿立たせられ候て白川橋まで見送りに参り候。左候て知恩院内罷通り候て祇園に罷出候て帰宅申し候。堀氏東福寺即宗院へ今日参詣にて候。田原友助相付き伏見の様に罷帰り候。尤も白川より御屋敷までは私同道申し候。左候て夕飯後権八同道にて大仏へ参詣申し候。耳塚の前餅屋へ立ち寄り賞翫申し候。帰路建仁寺門前罷通り候て、四条筋罷帰り申し候。

晦日　晴天

今日暫し清書に相掛かり候。明朔日参内仕るべき旨関白様より仰せ付けられ候に付、堀万右衛門殿へ相談申し候て用意申し候。

十二月朔日　雨天

今朝五つ時分御屋敷罷出候て近衛様へ参上仕り候。村井右膳殿出合われ候て承り候は、今日の儀めでたく思し召し上げられ候。か様の節ここより案内など御付けなされ候儀は一向これなき事に候え共、このたびは格別に思し召し上げられ候間、右膳事禁裏様、春宮様までは相付け候様に仰せ付けられ候由承り候。左候て献上物等の付け役この方御屋敷足軽三之丞へ右膳殿より具に申し含められ候て、やがて同道にて廣橋左少弁殿へ罷出候。藤木左近出合われ候て祝物等差し上げ候間受け取られ候。追付弁殿御対面にて候。右膳殿同道にて罷出候。御座敷には左近外に小姓両人にて候。弁殿前に祝物飾りこれあり候。さて、小形の廣蓋に口宣、宣旨入れられ候て、私近く召し寄せられ勅許めでたき由仰せられ候。頂戴仕り候て最前御礼申し候席に下り候処、右膳殿申し上げられ候は、宣旨までも同日に頂戴仕り候段ありがたき仕合わせに存じ奉り候由申され候。左候て御礼申し候て罷立ち候節、弁殿めでたき由仰せられ候。右膳殿咄に宣旨まで同日に出申す事はこれなく候、偏に殿下の御執奏故と存じ候由申され候。最前廣橋殿へ参り候て藤井左近へ取り逢い候節、右膳

申され候は、か様の節近衛殿より人相付けられ候儀は一向これなき儀に候えども、薩州の儀は由緒これあり、格別の儀を以て私今度禁裏、春宮の両御所まで相付けられ候と左近へ申され候。左候て諸方の案内は職事御役にて、廣橋殿より差し出され候。森江求馬と申す人にて候。

一　禁裏へ参内申し候て長橋の御玄関に罷上がり、森江求馬献上物並びに女中方の祝物飾り申され候て案内申され、口上は長橋様へ廣橋左少弁申し上げ候。このたび薩州の画工木村探元法橋勅許なりありがたく存じ奉り候、例を伺い献上物並びに祝物差し上げ候。廣橋左少弁披露仕り候に付使者差し添え申し候、皆々内へ相納り候て暫し間これあり、長橋殿より御口上、弁殿御添え役へ御相応、村井右膳殿へこのたび法橋参内めでたく思し召し上げられ候。御念入れられ相付けられ候由、私へ法橋勅許なりめでたく思し召し上げられ候。依て献上物相納め候。祝物の御礼宜しく申し入れ候様にと仰せられ候由候。それより直ちに春宮様御玄関に罷上り、献上物取り揃え森江求馬口上、右同断御返事これあり。右膳殿、求馬殿同前に近衛様へ参上、祝物差し上げ候て、また御役人中への祝物長持に入れ付け候て、求馬殿案内にて上卿徳大寺殿へ参上候て祝物上げ候て、求馬口上申され候。廣橋左少弁大納言様へ申し上げ候。このたび薩州の画工木村探元法橋勅許なりありがたき仕合わせに存じ奉り候、例を伺い祝物進上仕り候、廣橋披露仕り候処、使者相添え申し候由御返事、諸太夫衆、若狭守口上御相応私へも御口上これあり候。それより御隣り冷泉中納言殿伝奏にて御座候。参上仕り候て進上物同断、御同役葉室中納言殿へ参り候て同断、それより求馬殿罷帰られ候。官務へ参り候えと申され候故、かの方にて口上の趣尋ね候て、目録並びに添え使いへの青銅持たせ候て参り候。留守にて石野平次と申す取り次ぎに頼み置き申し候。直ちに廣橋殿へ罷出候て御礼首尾よく申し上げ候段御礼申し上げ置き候。左候て近衛様へ直ちに参上仕り候えば右膳殿出合われ候て、段々冥加の仕合わせ偏にこの御所様御威光にてとありがたく存じ奉り候由御礼申し上げ候。追付御湯漬下され候て加治掃部殿、木村内膳殿など出られ候て御酒下され候処、御目見仰せ付けられ候間罷出候様にと右膳殿奏者にて罷出候。関白様御諚、法橋勅許なり滞りなくめでたき事に思し召し上げられ候。先日は御屏風の下書き御覧遊ばされ候処みなみな宜しくこれあり、別けて心を入れ候と細やかなる事に思し召し上げられ候。左候て御前において廣蓋へ緞子入られ候て弁殿、大蔵殿口上にて、このたび法橋勅許御祝遊ばされ候て下され候由ありがたく冥加の次第に存じ奉り候由御礼申し上げ候。左候て御座敷すべり候て御次ぎにて大蔵殿勅許の祝儀承り候。元の御座へ罷帰り候てみなみなへ御礼申し上げ候。また御酒下され候て退出申し候。

二日　曇天　甚寒

今日九つ時分より近衛様へ罷上り候て、右膳殿取り合い候て唐眼鏡差し上げ候。左候て四人の諸太夫衆の内斎藤大蔵大丞殿は御殿中へ住まれ候故、四本入りの扇子箱右膳殿へ祝物に頼み置き申し候。退出申し候て直ちに加治掃部殿へ金子百疋目録、三人の諸太夫衆宅へ一々見廻申し候て五本入り扇子箱祝物に持参申し候。直ちに右膳殿宅田中と申す在所へ参り候て金子二百疋の目録持参申し候。夜入る時分帰宅申し候処に、道昌庵承順見廻にてゆるゆる咄罷在り候処、近衛様より村井右膳殿手紙相添え　禁裏様御用これあり候間、明巳刻参内仕り候様にと三沢壱岐守殿、小佐治阿波守殿、飯室勘解由殿より私へ書付参り候故御請け申し上げ候。承順事は深更に及び罷帰られ候。

三日　晴天

今朝早く仕舞い候て近衛様御所へ参上仕り候て、村井右膳殿へ取り逢い候。関白様御指図にて右膳殿同道禁中へ罷上り申し候て、御内玄関へ罷上がり候て申し上げ候処、追付壱岐守殿、阿波守殿出られ候て御奉行綾小路中納言殿、八條中将殿御書付相渡され御衝立の絵仰せ付けられ候。左候て御両卿へ御礼申し上げ候様にと両人より承り候て退出仕り、直ちに関白様へ参上仕り候て、御威光を以て右の通り仰せ付けられありがたく存じ奉り候由申し上げ候。左候てかの方より足軽相付けられ候て御両卿へ御礼に廻り申し候。尤も右の下書は京都において珍しき図書き申し候様にと関白様御指図遊ばされ候。

四日　雨天

終日下絵相勤め候。村井氏、加治氏より手紙にて祝物到来。晩来、朝山入来候。夜入り候て南泉院へ堀氏咄にて人参り候故かの方へ咄申し候。

五日　晴天

終日下絵相勤め申し候。

六日　同断

今日も終日下絵相勤め候。

七日　曇天　甚寒

今朝下絵近衛様へ持参仕り候。村井右膳殿へ差し上げ置き候。兼て今日は禁裏御神楽拝見仰せ付けらるべく候間、堀万右衛門殿同道にて罷上り候様にと承知仕り置き候故、晩来伺公仕るべき旨申し上げ置き候て退出仕り候。最前近衛様へ参上仕り候道にて、堀氏は平松殿へ御用これあり、帰路蛤御門にて逢い候故、兼約の通り藤本彦右衛門方へ待ち居り候て道昌庵へ参るべき由申し合わせ候故、直ちに彦右衛門方へ参り候て列れ立ち候て承順方へ参り候。茶事

一　掛け物　微宗雪の梅に小鳥二羽、彩色小立物
一　茶入　瀬戸はふ
一　茶杓　宗旦筒有り
一　茶碗　こもがい（熊川）か
一　水指　伊賀焼
一　花入　私遣わし候皷　山竹尺八　花水仙椿一花
一　書　院
一　上の床　永源寺開山寂室筆立物
一　次の床　永徳筆龍

席に上林三人出られ候て近付きになる。縁者の由承り候。

さて、承順家に龍伯様、維新様、家久様御文通、証文等拝見申し候。相済み候て直ちに近衛様へ罷上り候て村井右膳殿、加治掃部殿、藤谷兵庫殿、木村内膳殿など取り合い候て御神楽拝見候。案内掃部殿へ仰せ付けられ候。追付関白様御参内拝み奉るべき由にて、御門外に罷出候て見奉り候。四つ足の御門より御出、小隨身十人ばかりみなみな松明、御隨身一人御長柄の跡に付けられ候。御供みなみな布衣、御座敷へ罷帰り候て万右衛門殿、私布衣、私事は頭に黒き頭巾着け申し候て上に鳶烏帽子着け申し候。五つ過ぎに禁中へ罷上がり候、掃部殿今一人合わせて四人にて候。我々刀持ちはいかが仕るべき哉と掃部殿へ相談申し候えば、近衛殿下供奉の者にて候と人問わば答え候えと申され候て、万右衛門殿、与力有馬有助、私家来伊東庄右衛門召し列れ候て内侍所の御縁の下暖気これあり候故四人共に罷在り候。寒気甚だしく霜降り候事驚目候。さて、御神楽の御式出御の式なかなか言語に絶し候。深更に及び近衛様へ罷帰

り候て御湯漬、御酒下され候て御暇仕り候。この段も関白様御意にて、このごとくなり。帰路大雪、今夜菊池杢殿先年近付きの故罷出られ候て逢い候。帰路霜降り候。

八日　晴天初雪

今日大雪四寸程積る。近衛様へ罷上り候て今日村井右膳殿同道にて下書き五枚禁中へ持上り候て、小佐治阿波守殿へ取り逢い候て差し上げ候。八條殿へ差し上げ候処、天覧に備え候て相極め申すべく候間、御暇仕り候様にとの事にて退出仕り候。さてまた右膳殿事関白様より禁中御用にて探元事毎々罷上り候には及ぶまじく候、奉行両人へこの段仰せ渡され、右膳承り候て探元方へ時々申し達し、御衝立相調え候節持ち上り候様にと仰せ付けられ候由にて八條殿へ御目に掛かり、直ちに別の蔵入口に参り候由にて御台所門にて別れ候。私事は直ちに道昌庵へ茶湯の礼に参り候て、藤本宅へ立ち寄り罷帰り候。志賀武兵衛殿宅へ見廻り帰り候に、門口にて藤本彦右衛門に逢い候て、私方へ同道申し候て暫し咄候て、夜入り山下雲洞入来、閑談に及び候。

九日　曇天　甚寒雪不消

絵に取り掛かり候処、吉野の桜本坊出京にて堀氏へ見舞われ参会致し、絵書所へゆるゆる咄候。智積院の出家衆相来り候て咄候。晩来堀氏へこのたびの祝に粟飯出候て、茶事。

但晩来道昌庵見廻り断り申し候。

掛け物松花堂寒山、花寒菊、筒常修院様作、茶入古法眼　帖佐、茶碗唐津片口直し、杓幸阿

献立

皿　あまくさいわし　　めし　粟

おろし大根

汁　くづしたとうふ

たたきな　　かまぼこさい切

小皿　香の物　坪　ごぼう　にんじん　山のいも　　かまぼこ

菓子　大まんじゅう　　吸物　松たけもつぶなし　末段々

十日　半晴　雪不消

終日絵相勤め候。昼時分木村内膳殿、堀氏へ関白様より御使参られ候。御屏風絵少し拝見申したき由申され候間、万右衛門殿書院へ出候て見せ申し候。私は出合い申さず候。この内青江院弟子恵所使僧に参られ候て暫時帰宿申し候。堀氏へ藤本母舞子召し列れ候故呼ばれ候て、夜更ける迄遊興申し候。

消え残る雪の光にてる月の霜をかさぬる夜半の寒けさ

十一日　本書落候（晴天　雪不消）

（この項は、市立美術館本には存在するが、十日の記事に同じ）

十二日　晴天　雪不消

今日終日絵相勤め候。元春事宿替えにて別長屋へ移り申され候。夜入り候て堀氏へ咄に参るべくの由約束申し候て参り候。伊集院次太夫殿、能勢五郎兵衛殿、休兵衛殿。

十三日　晴天　雪残霜白

今日は禁裏御用下書き相極め候間、近衛様へ参上仕り候様にと昨日堀万右衛門参上の刻、右膳殿伝言これあり。罷上り候て右膳殿出合われ候て禁裏へ召し呼ばれ候故罷出候えば、御取り次ぎ衆より御衝立の絵つぐ、千年草、ひかんこ木瓜、三山鳥、鶴、蘭仰せ付けられ候。且つまた惣金にても砂子にても沈引にても、いかが仕るべき候哉と右膳殿御尋ね申し

上げられ候処、御奉行聞し召され候て、いずれの筋とは書き手の物数寄によるべく候間、その通りに仕るべき旨仰せ渡され候由承り候。左候て下書きは五枚差し上げ候えども、残り三枚は留め置かれ候て禁中より出申さず候由候、これまた承り候。並びに上卿職事へ絵一枚づつ上げ候様にと兼て承り置き候故相調え、今日関白様へ御覧に備え候処二枚共に宜しく思し召し上げられ候、なかんずく寿の字、福禄寿の図初めて御覧あそばされ候。兼ねて仰せ聞かれ置き候二幅対の中尊にしかるべく候間、その心得にて罷居り候様にと承知仕り候。追付退出申し候て下賀茂へ参詣仕り候。川の流れ木立の体、御前に雪の消え残りたる体言語道断にて候。帰路白川遍詢僧正へ見廻り申し入れ候て暫し御意を得候。途中の寒気甚だしく日暮れ帰宿申し候。夜入り候て大津屋仲兵衛参り候て風呂立て候間、入り候えと申し候に付一刻入りに参り候。権八暫時参り候て咄申され候。

（十二月）十四日　曇天　午後半晴

今日終日絵相勤め候。桜本坊朝の間私宅へ見廻にて候、茶振る舞い追付勤め場へ罷出候て、桜本坊も咄に出られ候。昼の内智積院より量識序で に仏絵師同道にて参られ候故、絵見せ申し候て近付きになり申し候。堀氏より桜本へ夕飯振る舞われ候故相伴致し候。宿屋次右衛門重の内茶持参候て座において呑み申し候。晩来宿元にて次右衛門、並河長兵衛へ茶振る舞い候。夜入り冨田清六殿、権八参会にて咄候。来る十八日渡部求馬殿同道にて参るべき由手紙右膳殿より到来申し候。

十五日　落記（曇天午後雪飛）

今日終日絵相勤め候。昨夜右膳殿より到来の手紙堀氏へ持参申し候て相達し候。桜本坊終日絵見物に出られ候て閑談申し候。夜入り候て中島利兵衛入来、川元市左衛門殿も同前に候。

十六日　半晴

今朝六つ半時分村井右膳殿より手紙到来、御絵の御用これあり候間、巳刻過ぎ近衛様へ参上仕るべき旨申し来り候。追付罷上り候処、右膳殿出合われ候て承り候は、例のごとく禁中より三人の衆書付到来申し候に付、関白様御指図の通り名代承りに巳刻御内玄関へ罷出候処、壱岐守殿よりこのたび院御所様御屏風の絵探元へ仰せ付けられ候間、この段相達せらるべく候由にて御書き付相渡し候。則頂戴仕り候。関白様へ則御礼申し上げ候。やがて申し上げられ候処、このたびの御絵様は何ぞ珍しき物考え申し候様にと仰せ付けられ候。左候て大徳寺へこれあり候探幽筆松の屏風は相勝れ候様に思し召し上げられ候間、下書きに相加え候様にと仰せ付けられ候。終日罷居り候て何れか絵様の儀仰せ付けられ候。かつまた御前へこれあり候由にて秋月と申す山水の屏風の御見なし遊ばされ候。その外にも段々御屏風、御掛け物共重ねて拝見仰せ付けらるべく候。御湯漬、御酒下され候。さて御奉行御両人様へ院御所御用仰せ付けられ候に付きては、御礼申し上げ候様にとの事にて、八條中将殿、綾小路中納言殿へ参上仕り候て申し上げ置き候。中納言殿御取り次ぎは松永玄安と申す医者にて候。夜入り候て村井右膳殿より手紙相付け大徳寺の屏風持たせられ候間受け取り置き申し候。有川興左衛門殿大坂より上がり候て咄に出られ候。堀万右右衛門殿、川元市左衛門殿同前今日の祝に御見舞い候。元春、権八も呼び申し候。右興左衛門殿便に御国元より遣わし候大竹並びに薪少し参り候。残り候薪炭は伏見赤井清兵衛へ頼み置き候由承り候。

十七日　雪降六寸計積

今日終日絵相勤め候。桜本坊、有川興左衛門殿絵書所へ咄申され候。興左衛門殿事八つ過ぎ大坂へ罷帰られ候故、このたび院の御屏風御用仰せ付けられ候由御国元へ書状相調え遣わし候。夜入り候て藤本彦右衛門、おとわ事宿元へ見舞われ候て咄申し候。権八客跡へ暫時見廻候。今宵月の光に映り候て雪の体奇観なり。今朝の雪、上京は深き事尺余りと藤本咄候。

十八日　晴天　寒気甚

今朝村井右膳殿、加治掃部殿より書付到来、関白様仰せにより寒気の節絵相調え大儀に思し召し上げられ候、御尋ねとして御樽並びに鴨二羽拝領仰せ付けられ候由、則御礼に参上仕り加治掃部殿へ取り合い候て御礼申し上げ置き候て退出仕り候。左候て屋敷へ罷帰り候て承り候えば、村井右膳殿、渡部求馬殿、万右衛門殿宅へ参り居られ候故、則かの方へ参会申し候。今日万右衛門殿馳走にて候。求馬殿このたび禁中御用の御屏風の絵仰せ付けられ相調えられ候に付、下書き持参にて見させ申され候。手前所持の唐絵筆見合せこれあり候処別けて悦び申され候。暮時分帰り申され候。左候て万右衛門殿宅にて延年に及び候。追付帰宿の序でに能勢五郎兵衛殿、木場源五兵衛殿も同伴候故、酔後冨田清六殿へ見廻候て咄深更に及び候。

十九日　晴天

今朝藤本彦右衛門、桜本坊入来候て追付勤め場へ罷出候て、遍詢僧正御見廻にて、このたびの絵御見物序でに角之倉與市殿も見物にて候。近付に相成り候。雪舟西湖の巻物書付これあり持ち合いにて候。先年公方様へも御覧に備え候由、顔輝、牧谿、所翁の三幅対も所持候間、重ねて見せ申すべき由咄にて候。唐絵筆約束申し置き候。やがて帰りにて候。桜本坊大鍾馗の絵望みにて、什物に致し候間、是非書き候様にと申され候故書き調え遣わし申し候。暇乞い申し候て帰られ候。今日大坂へ前田市兵衛殿下られ候に付状頼み遣わし候。夜入り候て大津屋へ風呂入りに一刻参り候。権八同道。

廿（二十）日　晴天　暖気而無風

今日終日絵相勤め候。白川より禅外参られ候て絵見物に二人同伴、角之倉與市殿家老勘兵衛と申す人、堀氏書院へ参られ候て禅外へ申し談候由にて絵見物、追付罷帰られ候。日暮れ帰宿申し候処に道昌庵承順法眼見舞われ候て兼約申し候。大竹の見分け申され候て、左候て堀氏見舞いにて候、道昌庵閑談に及び候刻移り候。帰られて以後関白様より拝領仰せ付けられ候一樽披き申され候故、冨田清六殿、押川六左衛門殿、木場源五兵衛殿、有馬休兵衛殿、能勢五郎兵衛殿、同権八参られ候て数盃に及び頂かれ、冨田氏舞踏延年の嘉儀なり。

廿一日　晴天　暖気雪残

今日終日絵相勤め候。御国元より大坂便に書状到来、かつまた冨田清六殿宅へ中村勘兵衛殿着にて書状到来申し候。両通共に当月五日、七日の状なり。大坂大野清右衛門殿より昨夜入り候て掛け物見分上げられ候故、田中甲治方へ頼み候て大坂へ差し下げ候。

廿二日　雨天　暖気雪不残

今日終日絵相勤め候。川元市左衛門殿より夕飯振る舞われ候故直ちに参り候、能勢五郎兵衛殿、権八同前候。夜入り候て権八より申し候は、先日殿下より拝領の鴨一羽遣わし候に付披き申すべく候哉、堀氏にも御出候様にと申し入れ候間参上候えと申し候故、冨田氏、川元氏参会申し候て祝申され候。追付木場源五兵衛殿入来候、堀氏の家来両人浄瑠璃三昧

にて延年数刻に及び候。夜入る間は雨頻りに降り候え共、帰宿の節は止み候て星稀に見え候。

廿三日　晴天　暖気

今日終日絵相勤め候。朝大津屋仲兵衛方へ例年餅振る舞いにて参り候えと申し来り候え共、寸暇惜しみ候故断り申し遣わし候。昼の間一刻志賀氏絵所へ入来。夜入る時分道昌庵より手紙到来、大竹使いの者へ持たせ遣わし候。兼約の儀によってこの如く候。永源寺開山寂室の筆借用申し候。紫野大心和尚の絵讃二枚持たせ参り候。一枚は堀氏へ遣わす筈なり。

廿四日　雨天　暖気

今日出かけに堀氏へ大心和尚筆持参申し候て遣わし候。終日絵相勤め候。夜入り候て冨田清六殿、中村勘兵衛殿同道にて咄に出させられ候。勘兵衛殿召し列れ候足軽は伊作野首の住人にて、呼び候て酒茶振る舞い申し候。

廿五日　半晴　暖

今日終日絵相勤め候。院御所御屏風の下書きこの三日取り掛かり罷在り候。朝の間中村勘兵衛殿御国元へ罷立たれ候。書状並びに袴地、煎茶類音信申し候て頼み遣わし申し候。夜入り候て堀氏より咄に招かれ候故参り候。茶賞翫申し候。只一人にて候。

廿六日　朝晴天午後雪飛

終日院御所御用下書き相調え、夜入り候て川元市左衛門殿招き候て拝領の御酒振る舞い候。立たれ候て木場源五兵衛殿咄に出られ候て、閑談に及び候。夜入晴天。

廿七日　半晴雪飛

今日院御所御屏風の下書き相済ませ候。村井右膳殿方へ明日殿下御用の花鳥御屏風並びに右の下書き、大徳寺松の屏風持参仕り候て差し上ぐべき旨、手紙を以て問い合わせ申し候処、勝手次第参上仕り候様にと返事申し来り候て、追付右膳殿より手紙参り候。勝手次第と申し遣わし候え共、四つ前罷上り候様にと申し来たり候。夜入る時分より堀氏へ年忘れの祝に料理振る舞いにて候。冨田清六殿、押川六左衛門殿、伊集院休兵衛殿、伊集院次太夫殿、佐々木源兵衛殿、木場源五兵衛殿、渋谷孝九郎殿、能勢五郎兵衛殿、同姓権八殿、川元市左衛門殿、前田市兵衛殿にて候。

廿八日　朝晴天午後曇（夜入晴天）

今朝四つ前近衛様へ参上仕り候。仰せ付けられ候御屏風の内花鳥一枚双成就仕り候て差し上げ候。院御所御用下書きも同前差し上げ候処、一條様御成りにて暫し待合い居り申し候。御立以後右の品々御覧遊ばされ候処、花鳥下書きにて御覧候とは格別の儀にて、別けて御褒美思し召され候。下書きも宜しく御座候由仰せ下され候。御吸物、御酒下され候て村井右膳殿挨拶にて候。左候処に松平石見守殿御出候て御言葉掛けられ候。追付御暇仕り候て直ちに道昌庵へ見廻申し候て暫し咄申し候。帰路志賀武兵衛殿へ立ち寄り申し候処、中島利兵衛入来候て咄候。罷帰り候て夜入り南泉院へ年忘れの咄に堀氏、冨田氏、能勢五郎兵衛殿、木場源五兵衛殿参会申し候。

廿九日　朝曇天午後雨降

今朝仕舞い候て冨田氏同道にて東福寺即宗院へ参詣仕り候。院主へ申し入れ候えば堀氏も参詣に居られ候故、閑談数刻に及び候。時節の構い無く閑寂の地真半日の閑なり。院主は葉室殿御二男にて不凡人候て御心入

れ感心せしめ候。追付罷立ち候て堀氏は駕籠にて帰られ、清六殿同道申し候て七条の道場へ参り候て、院代修寮軒は浄光明寺の隠居にて、同寺裏に赤塚仁左衛門入道一水居られ候て久々に咄申し候。帰路雨降り候て古道具店見物、瀬戸の茶入一つ求め得候。山下雲洞旅宿へ立ち寄り候て罷帰る。清六殿催しにて蔵の手伝い、喜右衛門宅へ居風呂立ち候故入り候て清六殿宅へ参り候て、権八、木場氏延年に及び候なり。

晦日　曇天　晩来大雪（雨）暖気

今日終日在宿申し候て仕廻取り掛かり候。晩来御屋敷中歳末の祝儀申し入れ候て、堀氏へ参り候えば、みなみな参会にて盃酒候。やがて罷帰り候処、元春、権八祝候て一樽持参にて披き候。折節山下雲洞見舞いにて咄候。

今日のみと惜しむは同じ一年も都の空の暮れをしぞ思う

享保廿年卯正月元日　雨天

今朝雨天暖気。御屋敷中礼儀申し入れ候。藤本彦右衛門入来、追付罷立ち候て、以後中島利兵衛、田中甲治入来、暫し咄にて罷帰り候。夜入り候て堀氏へ初咄に参り候。やがて川元市左衛門殿、能勢五郎兵衛殿、木場源五兵衛殿出られ候て、閑談に及び候。

二日　雨天

今日は御蔵祝にて呼ばれ候故参り候。御屋敷中十二人の人数相残らず候て数盃に及び候。追付罷帰り候て元春、権八この方へ呼び候て初咄致し候。

歳旦　嬉しさを筆に写さむ珍らしき都の春を今朝はむかえて

三日　半晴

今朝四つ時分より近衛様へ年首の御祝儀に参上仕り候。村井右膳殿へ取り逢い候て申し上げ置き候。直ちに道昌庵、藤木、瀬尾新次郎、同名源九郎、中島利兵衛、田中甲治へ年礼に立ち寄り候。八つ半時分帰宿申し候。夜入り権八一刻入来候。御国元への書状相調え申し候。

四日　晴天

今朝一刻絵書所初開き申し候て、かねて約により飛鳥井殿御鞠初めの儀式見物に罷出候。南泉院家より平松殿御方へ入れ申され、石黒主膳案内にて候。院家、堀氏、拙者、吉祥院小僧衆両人、元春、権八にて候、驚目申し候御事なり。帰路藤本彦右衛門へ皆々呼び候故馳走これあり、暫し休み候て同道にて罷帰り候。夜入り候て隣家の喜右衛門夫婦呼び候て酒振る舞い候。冨田清六殿も出られ候。

五日　晴天

今日終日御屏風絵に取り掛かり候。御国元より町人共申し請け候て紗綾払いに罷上り候に付、田中甲治罷出候て差引申し候に付、弁当堀氏へ振る舞いの故相伴申し候。

六日　（朝）晴天午後雨降暖気

今日終日御屏風砂子蒔き候。夜入る前渋谷孝九郎殿母儀、増田半助妻おとわ年礼に入来。罷立たれ候て南泉院家へ堀氏咄にて参り候様にと申し来たり参会致し候、元春事も呼ばれ候て参り候。雨なお止まず。今昼過ぎ伊集院次太夫殿大坂へ御用により下られ候故、年頭の書状相調え差し遣わし候。

七日　朝晴天午後雨降

今日終日御屏風砂子蒔き候。夜入る時分帰宿申し候。堀氏白馬の節会拝見の咄承り候。例年夜行わる式候えども、当年は白昼故私事も拝見罷ならず候故なり。刺髪の人は相ならず故なり。

若菜　いつの間につむとも見えず五十余り
今日七年とせの春の七草

夜入り候て川元市左衛門殿咄に参られ候。堀氏、能勢五郎兵衛殿出られ候。折節飛脚便に御国元状到来、十二月廿二日の日付なり。

八日　晴天　朝薄雪

今日終日砂子蒔き候て、七つ時分帰宿申し候。渋谷幸九郎殿、増田半助子息一刻入来、追付藤本入来、半助こと入来にて咄候。村井右膳殿より手紙到来候。院御所御屏風下絵治定仰せ付けられ候間、明朝飯後近衛様へ参上仕り候様にと申し来たり候。御請け申し遣わし候。

九日　晴天

今朝飯後近衛様へ参上仕り候。村井氏へ取り逢い候。仙石右門殿へ近付になり申し候。左候て御使者の間に罷通り候て、院御所御屏風絵金花鳥書き調え申すべき旨承知仕り候。下書きも相渡し候、御請け申し上げ候。右膳殿申され候は、今日禁裏御修の護摩壇拝見仕り候わば案内相付け申さるべき由承り候故、何とぞ拝見仕りたき由申し候に付、利助と申す御侍案内にて紫宸殿へ罷上がり候て、東寺の長者嵯峨大学寺にて御詰候坊官衆へ取り逢い候て、案内の者これあり、御壇上の様子委細物語にて候。弘法大師伝来の小曼多羅、五大尊、金の舎利塔、輪法、五鈷、聖天尊その外あまた拝見仕り申し候。玉座の内御簾越しに拝見仕り候。宇治川佐々木、梶原の武者絵御屏風これあり候。春宮の御座にも何やら武者御屏風これあり候。ほかに獅子の御屏風もこれあり候。上面御襖の上に蓬莱山、下に老松二株、左右聖賢の御障子、色紙形准后家熙公御筆、御襖の縁地色浅黄に蝶鳥、紫または金白糸織物にて候、得と拝見仕り候。この壇内に入り候事は曽て罷ならざる事に候えども、右長者の御引き合いにてこの如く罷出候て、長者より御吸物下され候、松茸にて候。御酒土器にて出申し候、取肴小さき台に土器二つ、人参、牛房銘々に盛り候て、松梅を差し出し候て、段々詰衆出られ候て、酒しい申され土器三つ下され候。左候て退出仕り禁庭ゆるゆる拝見仕り候。御門外において利助殿へ別れ候て、直ちに白川遍詢比丘へ年礼に参り候間、暫し御意を得候て罷帰り候。夜入り冨田清六殿、川元市左衛門殿咄に招き候て閑談を得候。

十日　晴天

今早朝村井右膳殿より手紙、金花鳥御絵様の事に付きて泉涌寺へ見合いに参りたき由頼み置き候処、明十一日午刻泉涌寺内法音院と申す寺へ、渡部求馬殿先達て参り居らるべく候間参り候様にと申し来たり候、返事申し遣わし候。夜入り候て堀氏、能勢五郎兵衛殿咄に出られ候。昼の内朝山年礼に入来。

十一　晴天

今朝飯後打ち立ち候て、元春、権八同道申し候て泉涌寺へ参り候て、法音院へ相尋ね候えば求馬殿方丈へ待ち居られ候由にて、出家衆案内にて参り候えば大仙和尚へ御近付きに罷なり候。当輪番衆は安楽院と申し候て、これも同前近付きに罷なり申し候。求馬殿事は関白様より仰せ付けられ候て参り候由咄にて候。追付餅汁、引き次に茶漬出申し候。左候て御座敷中残らず見物仕り候、誠に以てありがたき仕合せにて候。大仙和尚は御座敷において暇乞い申し候て、安楽院は玄関板の間迄出られ候。求馬殿事は法音院へ寄り申され候て、別けて申すべき由申され候て暇乞い申し候。それより大仏に参り候て三十三間堂の側にて御酒など食べ候て、直ちに七条に古物見物に立ち寄り候、懐紙四枚相求め候。

十二日　曇天　午後雪飛

今日殿下へ昨日の御礼候。罷上り候。村井氏へ取り逢い候て申し上げ置き、御暇仕り候砌堀氏参上にて罷居られ候処右膳殿申され候は、よき折節御両人御参り候。当年はいまだ御対顔遊ばさず候間、一刻待ち奉り候て、追付関白様にも還御なさるべく候由承り候処、やがて還御に御座候て、好時よき時節参上仕り候由にて御目見仰せ付けられ、奏者村井氏、先ず堀氏罷出られ候て御諚これあり候。追付私罷出候て御口祝頂戴、御諚

珍しい都の春を重ねて、この間は花鳥の絵成就にて下書き見た

とは格別に何か見事な事じや、段々仕立も言い付けてあろう、

御所の御用も仰せ付られてめでたい。

左候て大膳太夫殿、近藤殿子息御次ぎ候て祝儀承り候。御書院の御飾り拝見、御表の殿中の飾り右膳殿咄にて段々拝見仕り候。左候てやがて御吸物、御酒下され候。さて当日禁裏御修の護摩に付きて、東寺の長者これあることを知らず候を殿下へも長者より差し上げられ候由。一合堀氏へ拝領仰せ付けられ候。私へは紫宸殿御修の護摩、歓喜天の御だん三つ拝領仰せ付けられ候、誠に以てありがたき仕合せに存じ奉り候由御礼申し上げ候。堀氏は直ちに御修拝見に利助殿案内にて参られ候故日花門の外にて別れ候て、私事は河原町竹屋下り町渡部求馬殿へ昨日の御礼に立ち寄り申し候、留守にて申し置き候。夜入り候て元春宿へ呼び候故参り候、権八同断。

十三日　曇天

今朝堀氏より餅振る舞われ候、元春、権八、雲洞、我等にて候。一刻罷帰り候て追付罷出、終日御屏風の絵仕立て候。晩来喜右衛門宿へ冨田氏風呂立てられ候故入りに参り候。

十四日　晴天　餘寒甚敷

今日終日絵仕立て候。晩来堀氏より御国元粟飯振る舞いにて、押川六左衛門殿、有馬休兵衛殿参会申し候。暮れ候て帰宿。

十五日　晴天　餘寒甚敷

今朝御屋敷中祝儀申し候。直ちに罷出候て終日御屏風絵相調え候。村井氏より明十六日節会拝見仕り候わば、暮れ時分参上仕り候様にと手紙到来候えども断り申し遣わし候。夜入り候て冨田清六殿呼ばれ候故権八共に参り候て咄候。今夜明月昼の如し。

十六日　晴天　餘寒甚敷

終日御屏風の絵仕立て候。

十七日　曇天

今日瀬尾源九郎より堀氏を初め、御屋敷中人数に芝居見物馳走仕り候付きて、誘引候て参り候。直ちに祇園の茶屋へ呼び候て夕飯振る舞い候。夜入り五つ時分川元市左衛門殿同道にて罷帰り候。

十八日　曇天

今日近衛様御書かせ遊ばされ候山水の御屏風残らず成就申し候。仕舞い候て罷帰り候処吉野山桜本坊より書状到来、かの地調えの樽並びに堂上方文二通給い候。夕飯早く仕舞い候て冨田清六殿同道にて清水へ参詣仕り候。帰路岡本半七方へ立ち寄り候て書物共見申し候。馳走に及びゆるゆる咄罷在り候。

十九日　曇天

今日近衛様御用真山水御屏風絵でき仕り候に付きて、持たせ差し上げ候。加治掃部殿を以て差し上げ候処御覧遊ばされ候て、殊の外宜しくでき仕り候由御褒美の由仰せ出され候。御吸物にて御酒下され候。掃部殿御召

しにて罷出られ候。山水御褒美の御歌遊ばされ候て拝領仰せ付けられ候、誠に以てありがたき次第に存じ奉り候由御礼申し上げ候。追付退出仕り候て直ちに東福寺即宗院へ参詣仕り候て、院主へ御目にかかり候、やがて堀氏も参詣にて同前咄仕り候。帰路同道申し候て日暮れ時分罷帰り候。夜入り道昌庵入来、堀氏も入来にて閑話を得候。

もろこしやさぞな名にたつ山水の
こころははしるうつし絵はこれ　　家久卿

廿日　雪降積二寸

今朝仕舞い候て近衛様へ昨日の御礼に罷上がり候て、村井右膳殿へ取り逢い候て申し上げ候。途中雪飛頻なり。御屋敷へ罷帰り候て南泉院家より夕飯振る舞われ候て直ちに参り候、堀氏、元春同席申し候。夜入り候て村井氏より小佐治阿波守殿手紙にて禁裏御用御急ぎの儀申し来たり候、返事申し遣わし候。今日近衛様において村井氏咄に承り候は、昨日御即歌私へ拝領の儀別て稀なることに候。曽てこれなきことに候えども、この節は格別思し召し上げられ候ての御事と存じ奉り候。自分にも一度右の様なる儀これあり、傍輩中にも今以て羨ましく申され候由咄にて候。

廿一日　晴天　餘寒甚敷

今朝早く仕舞い候て近衛様へ罷上がり候て村井氏へ取り逢い候て、昨夜禁裏御屏風絵、来月十日頃でき差し上ぐべき由仰せ下され候えども、別けて余日無く候故、仕るべき様御座無く候。二月中に成就仰せ付けられ下されたく願い存じ奉り候由申し上げ候処、関白様へ則申し上げられ、その通りに仕るべき由仰せ付けられ候。尤も禁裏御奉行衆へは右膳参り候て、その段申し達すべき由仰せ付けられ候由承知仕り候。追付罷帰り候て御屏風共どうさ地引かせ候て仕舞い申し、智恩院御忌見物に参り候。山中雪消え残り候て諸方よき見物に候、同伴冨田清六殿、押川六左衛門殿、木場源五兵衛殿にて候。智恩院において元春、権八事も暫し参合候えども、清六殿、源五兵衛殿同道にて御屋敷へ罷帰り候。左候て夜入り源五兵衛殿宅へ清六殿参会にて咄申し候、堀氏も一刻出られ候。昨日家来欠落いたし候故何か世話の由にて帰られ候。清六殿、私は咄候て四つ過ぎに罷帰り候。

廿二日　雪降積三寸　日午晴天

終日禁裏御衛立の下絵相調え候。絵書所へ藤本一刻見に来たり候。さて今朝即宗院主より使僧、浄首座にて二号楚紙御所望候。暫時咄候て追付罷帰られ候。

廿三日　曇天

今日終日禁裏御衛立の下絵相調え候。村井氏より手紙到来、今日御奉行より御用の由申し来たり罷出られ候処、御衛立は来月廿日頃、御屏風は三月節句頃迄相調え候様に仕るべき旨仰せ付けられ候由申し来たり候に付、則御請け申し遣わし候。暮れ時分より吉祥院白河の遍詢僧正より伝言使いに出させられ候て、暫し咄居られ候。立たれ候て押川六左衛門殿追付咄に入来、四つ過ぎ迄居られ候。

廿四日　晴天　暖気

今日終日金花鳥の下書き相調え候。夕飯下され候て壬生の地蔵へ権八同道にて参詣申し候。帰路五条の天神へ参詣、直ちに絵具屋五兵衛宅へ立ち寄り候て暫し咄候。五つ時帰宅申し候。

廿五日　晴天　暖気

今日終日御屏風の清書相調え候。今朝御国元より正月二日の書状到来申し候。今夜入り候て権八宅へ咄に候様にと申し候故出足申し候、木場源

五兵衛殿参会申し候。堀氏より源五兵衛殿へ用事と申し来たり候故帰られ候に付、同前罷帰り候。

廿六日　晴天

終日御屏風絵相調え候。堀氏へ寿国寺弟子禅竈と申す小僧当時宇治黄檗へ詰め居られ候、茶一服持参にて呼ばれ候故参り候て賞翫申し候。夜入り候て私旅宿において西行の御巻物次第、序でに元春、権八相合い候て見合わせ候。未全候えども先ず召し置き候。今朝南泉院御見舞いにて候、遍詢律師より伝言これある故なり。

廿七日　曇天

終日御屏風絵相調え候。

廿八日　雨天　暖気

終日御屏風絵相調え候。今晩は近衛様御会初めにて御座候故、兼て拝見仰せ付けらるべき旨承知仕り置き候故罷上がり候。夜入り大雨にて候。御湯漬下され、御酒下され候て五つ過ぎに罷なり候。追付御会始まり申し候に付きて御座末に簾これあり、その内に罷在り候。御上座閑白様、閑院宮様、一乗院宮様、次に左右堂上方、発声持明院殿並びに御弟子衆差し寄せられ助声なり。御会終り候て御三人様内へ御成り、堂上方も内へ引き入られ候て追付御出座、堂上方も同前、御膳上る。関白様御給仕石井殿、閑院様御給仕、一乗院宮様御給仕、その外様へは御内衆布衣脇差にて候。楽人三人東の御後縁側に参り、笙二人、ひちりき一人。御盃一遍通り候て三つの吸物始まる。持明院殿郢曲嘉辰令月の詩、また御息男嘉辰令月御謡候、また持明院殿御謡物これあり候。持明院殿へ御引手物これあり候、堂上取られ候。左候て私共事は罷退き候。それより加治掃部殿、村井右膳殿、木村内膳殿、菊池杢殿取り持ちにて御酒下され候。南泉院家は平松殿より仰せ上げられ候て同前罷上られ候、吉祥院列れられ候。私方は元春、権八召し列れ候様にと仰せ付けられ候故同前候。堀氏は、押川六左衛門殿拠なく申され候故右膳殿へ申され候て同道候。帰路雨止み候て深更に及び御暇仕り候。

但し今夜西行の巻物絵序でに見合い候て右膳殿へ相渡し候。

廿九日　半天（晴）

今朝仕舞い候て殿下へ昨夜の御礼に罷上がり候、村井氏へ取り合い候て申し上げ、追付退出仕り候。罷帰り絵書所へ一刻罷出候。帰路志賀武兵衛殿へ暫時立ち寄り申し候て咄申し候。夜入り候て並河長兵衛入来、暫時咄候。

晦日　晴天

終日御屏風絵相調え候。南泉院へ遍詢律師御出候付きて参り候様にと仰せられ候えども、当日折角御用相勤め候故、ゆるゆる罷出候儀は御断り申し候て、暫くずつ両度参り候て閑話を得候。夜入り候て堀氏へ咄に参り候。佐々木源兵衛殿、能勢五郎兵衛殿、木場源五兵衛殿参会申し候て、深更に及び罷帰り申し候。

二月朔日　晴天

今日終日御屏風絵相調え候。昼道昌庵省順通られ候故堀氏玄関にて逢い申し候。

二日　雨天

今朝御屏風絵相調え候て、九つ半時分より兼約により角倉與市殿へ参り候、同道謂所南泉院家、堀氏、拙者、吉祥院並びに元春、権八。かの方檀那寺嵯峨金剛院真如庵は、肥後高瀬の産、先年御国元へ滞在、南泉院において旧知故相伴なり。與市殿宅先ず書院床三幅対、中尊顔輝文殊、

左所翁龍、右牧谿虎、生花室咲き梅桜、梅は紅白、椿二輪紅白、金の大筒花入、花台あり。小書院の床の後、光明院宸筆横物御歌

萬代とみかさの山ぞよほうなる天の下こそ楽しかるべし

御書き判

並びにこの如き違い棚、霊元院法皇様より拝領の新筆、堂上方の十体和歌巻物、元朝勅書、下に硯石、紙。左候て雪舟筆山水の一軸、国々人品の一軸、行年八十二歳の筆なり。並びに小松内府重盛卿醫王山へ金渡されし時、徳光禅師より数品謝礼に遣わされ候内の青磁の茶碗

馬蝗絆茶碗（図が書かれているが省略）

口さし渡し四寸ばかり、口の廻り薬うすく、

底にひびきありて大明国へ渡され、かすがい打たれしなり、

高台うすし、底に薬厚くして薬かた光りあり、色光りす、

箱うすため塗り、

家皮の塗り物、袋金襴錦、

この茶碗東山殿義政公御所持たりしに、角之倉殿先祖侍臣たりし故拝領にて、今所持にて拝見申し候。箱並びに家共にその時のままなり。さて段々馳走候に及びて、嫡男多宮殿仕舞二番並びに太鼓、二男九十郎殿よき若衆にて仕舞三番地謡、家来衆また家来衆仕舞い二番にて候、家老松山勘兵衛取り持ち申され候。さて庭の泉水八十年前植え候松雑木にて古く見え候。就中三間余りの石橋は往昔板倉坊州五条の橋を石に仰せ付けられ候て、万民いかが申し候哉と目付を隠し置れしに、末代までもよき御見立てと人々言いしに、乏しき者の言いけるは、坊州ほどの御人にて地震はあるまいかと思し召さざれしやと言いけるに、一生の誤りと思い給いしに、果たして地震に崩れぬ。されども橋は残りて今にあり、その橋のかかりし時の残石この石橋なりと。また三条の橋の柱石にて、今侍る事石橋の来由なりと輿市殿咄承り候。三男菊丸殿は白河の逼詢律師の御弟子にて、近江観音寺後住の契約によりこの参会なり。殊の外の御馳走にて候。深更に及び帰路雨止まず候。違い棚の上袋棚の押絵は絹にて張り候て、惺々翁の色々の唐人形書かれし押しものなり。また二男九十郎殿は江戸吉田意庵法印の養子に約束の由、法印これは角之倉殿二男家の由、角之倉殿先祖に醫師ありて入唐せし人なり。漢において皇帝の御病を治せしに称意庵と勅ありしによりて、吉田氏に醫を譲りて意庵の号ありと醫の書等は皆譲らるると。将にまた座敷の額に恬松の二字梅恬の書あり、漢において心安くありし唐人の筆なりと。その外色々の書ける物もありと輿市殿物語なり。

三日　晴天　暖気

今日終日絵相調え候。本田正右衛門殿登りにて逢い中し候。藤本母一刻見廻申し候。夜入り候て冨田清六殿へ茶振る舞い申し候、四つ過ぎ時帰られ候。

四日　晴天　暖気

今日終日絵相調え候。能勢五郎兵衛殿、本田正右衛門殿大坂へ帰られ候故、御国元へ書状頼み遣わし候。大野清右衛門殿唐大竹もこれあり遣わし候。夕飯後権八同道申し候て歩行に参り候、先ず祇園にて御たばこ下され候。安居にて暫し休み五条坂松原通り六波羅蜜寺見物申し候て、四条に出候て罷帰り候。

五日　晴天　暖気

今日終日御屏風絵相掛かり候。角之倉與市殿三幅対の絵借用致し候て今日写し申し候。吉祥院方へ頼み遣わされ候故、則持参申し候て返進申し候えども、白川橋遍詢律師御弟子與市殿三男菊丸殿、今日師房入りにて候故参らる由にて仙良坊へ頼み置き候。

六日　晴天

今日在宿申し候。槿花幼童子一回忌にて候故、吉祥院申し受け候て霊膳手向け申し候、元春、権八相伴にて候。堀氏へ志ばかりに菓子重の内進入申し候。冨田氏この方にて吸物、御酒、茶進め申し候。夜入る時分湯入りに呼ばれ候故喜右衛門宅へこれあり、参り候て入り申し候。一刻清六殿へ湯の礼に参り候。佐々木源兵衛殿一刻かの方にて逢い候。

七日　晴天　春色催

今日終日御屏風絵相調え候。晩景罷帰り居り候処、当分妙心寺光国院へ罷居られ候全首座は伊作田尻の産にて、祝井吉左衛門殿舎弟、無学和尚の弟子なり。これにより近付きとなり見舞われ、得と閑談を得候。かつまた今昼村井右膳殿より院御所御屏風、足宿の儀この間申し入れ置き候処持たせ遣わされ候、則返事申し遣わし候。

八日　曇天

終日御屏風絵に相掛かり候。元春、権八事明後十日巳の刻召し列れ候て近衛様へ参上仕り候様に御目見仰せ付けらるべきとの由、堀万右衛門殿方へ掃部殿、右膳殿より手紙参り候。最初万右衛門殿心入れにて両人の衆へ噂これある事故、万右衛門殿方へ申し来たり候。尤も藤本彦右衛門一刻絵書所へ入来、兼て頼み置き候武者小路殿御短冊桜井殿より下され候由にて持参候、暁述壊の歌にて候。願い相叶い候て満足の由申し候。夜入り候て道昌庵承順法眼入来にて閑談を得候。四つ前帰られ候。

九日　晴天　暖気

今朝御屏風絵相調え候。昼前に薬師山清江院尼、藤本母、朝山同道にて入来候。粟飯相調え候て振る舞い、ゆるゆる咄申され候。禅閤様御筆の物、雅章の文、園基香の文給い候、七つ時分帰られ候。今朝早く大仏馬町三師島明神の向い、桜の庵に居られ候自性尼見舞い候て初めて逢い申し候。祝井吉左衛門殿娘にて候故尋ね来られ候。夜入り候て元春、権八へ清江院より遣わされ候色紙相渡し候故来たり候。左候て追付堀氏へ見舞い候えば南泉院にて候故かの方へ参り候て、駕籠の儀明日仰せ渡され候様にと申し達し候。押川六左衛門殿へ直ちに立ち寄り候て申し達し候、暫し咄候て帰り候。

十日　雨天　小雨也

今朝巳の刻元春、権八召し列れ候て近衛様へ参上仕り候、加治掃部殿へ則取り逢い候て御使者の間へ罷通り候処、右膳殿出られ候て今日の御礼申し上げ候。禁裏御役人衆一人、医師衆一人、御内證より二人、元春、権八にて候、御口祝頂戴仕り候。私事今日は打ち込みの事に御座候間、御目見は仰せ付けられず候由御諚の旨右膳殿咄にて候。左候て御吸物、御酒下され候て諸太夫衆四人へも逢い申し候て退出仕り候。直ちに並河長兵衛へ立ち寄り候て暫し咄候、元春、権八同前に候。直ちに私事は角之倉與市殿へ先日の御礼に参り候て申し上げ置き候、罷帰り候。御国元より正月十八日の書状到来候。夜入り候て冨田清六殿より茶振る舞われ候故参り候て閑談に及び候。春雨降り出し候て夜来閑寂。また今日近衛様において私書き調え候御屏風の仕立て成就仕り候由御見せ候。なかなか申し尽くし難く候、奇麗にて候。探幽三幅対も拝見仰せ付けられ候。

十一日　雨天

今日終日御屏風絵に相掛かり候。堀万右衛門殿へ相談申し候て元春、権八事昨日の御礼に近衛様へ罷上り候て、右膳殿、掃部殿へ申し入れ置き候て罷帰り候。晩来藤本彦右衛門入来、吸物、酒振る舞い候て咄候。桜井殿へ頼み奉り候て武者小路殿御短冊申し請け候、御礼に唐筆、石の香合上げ申し候処御満悦の旨仰せられ候由咄申し候。夜入り元春宅へ祝候て堀氏、拙者、権八呼び候て馳走申し候。四つ過ぎ帰宅申し候。

十二日　半晴

今日終日御屏風絵に相掛かり候。夜入り候て追付能勢権八方へ祝候て呼び候故参り候、堀氏、川元氏、木場氏、元春にて候。四つ過ぎ罷帰り申し候。

十三日　晴天

今日御屏風絵に取掛かり候。昨日より風気これあり保養申し候、雲洞殿へ頼み候て針仕り候。昼の間白河禅外一刻絵書所へ入来候。夜入り五つ前小地震あり。

十四日　晴天

今日終日絵に相掛かり候。昼の内堀氏より茶振る舞いせられ候。朝出候節南泉院へ僧正勅許悦びに参り候処、堀氏かの方にて松山勘兵衛殿参られ候て一刻咄申し候。晩来山下雲洞老へ薬給い候様にと頼み存じ置き候て、旅宿へ見舞われ候て閑話を得候。薬取りに則長蔵相付け候て遣わし候、折節雨降出し候。

十五日　半晴　（雪飛）

今日屋敷中祝儀申し入れ候て絵書所へ一刻罷出候。風気故在宿申し候。東福寺の涅槃会にて堀氏へ申し合い置き候えども、不快にて断り申し入れ候。元春、権八へ庄左衛門相付け候て参詣いたさせ候。冨田氏招き候て餅汁振る舞い候て咄申し候。茶持参候て賞翫申し候。

十六日　晴天　暖気

今朝一刻絵書所へ罷出候。不快これあり候故保養のため山下雲洞見来たり候故誘引申し候て罷出候。先ず祇園に参り候て腰懸に暫し休み、長楽寺見物候て双林寺へ参り候。官香持参仕り候故火もらい候て西行上人の墓に捧げ候処、庵坊出られ候て何か咄これあり候。今日は上人の忌日にて候故、

ここに来てその二月の跡問うも都の旅のうれしさぞ思う

直ちに高台寺天神に参り候て、直ちに清水に参詣申し候。巡見候て清閑寺へ参り候、高倉院の御陵後に九重の楓これあり候。同所に小督局の墓これあり候、寺内見物申し候て直ちに玉章地蔵、小町の墓見物申し候。それより鹿ヶ谷の谷越え大津道罷帰り候て、大谷通り候て、鳥部山茶店へ立ち寄り候て休息申し候。直ちに清水に罷出候て、また祇園へ参り候て、百合と申す歌読みの女腰懸に休み候。歌読み置き候由申し候て、

寄嶋恋

見ずばまた恋しからましみつ汐の干潟に近き浦の初嶋

梅

梅が香のしるべと致し我が宿の花のたよりになどや問い来ぬ

追付罷帰り候。祇園前にて伊集院次太夫殿、押川六左衛門殿、有馬休兵衛殿、川元市左衛門殿へ逢い候。相次ぎ候て南泉院へ逢い候処、雲洞事は引かれ候て参られ候故相別れ申し候。冨田氏へ立ち寄り候えば、並河長兵衛私頼み置き候表具持参候て旅宿へ呼び候て清六殿と見物に入来候、吸物、酒出し候て暫し咄候。元春も見に来たり候。

十七日　晴天　暖気

今日終日御屏風絵に取り掛かりて禁裏様御衝立成就致し候。堀氏へ関白様より御肴拝領にて披きこれあり、御屋敷中みなみな参会に及び候。それより押川六左衛門殿、伊集院次太夫殿同道にて錦の天神へ参詣申し候て、直ちに誓願寺未開紅の梅見物に参り候え共いまだ開かず候間、歩行序でに越後屋市左衛門方へ立ち寄り候て馳走に及び候。薄茶点前仕り候て振る舞い候、四つ過ぎ帰宅申し候。また今朝絵書所へ南泉院より使僧にて、平松殿より下され候由にて赤飯、しめ物御音信候、賞翫致し候。

十八日　晴天　暖気

今日一刻絵書所へ罷出候。兼約により道昌庵承順より丸山橋の寮へ堀氏を初め御屋敷中例の如く振る舞われ候。所謂堀氏、冨田氏、押川六左衛門殿、有馬休兵衛殿、川元市左衛門殿、伊集院次太夫殿、能勢五郎兵衛殿、木場源五兵衛殿、佐々木源兵衛殿、渋谷孝九郎殿取り持たせ、藤本母子、田中甲治、中島利兵衛、承順子息省順にて候。元春、権八も参り候えと申され候故参り候。段々馳走に及び候、終日遊興候。伊勢の祭主藤波殿へ勤められ候人松本杢と申す人、承順へ幼年より心安き由にて参られ候て仕舞数番、地謡は京都留守居中間振る舞いの故取り持ち仕り候。五郎右衛門殿と申す者ほかに一人参り候。舞子一人外に当年七歳に罷なり候女子色々舞い申し候、地謡三味線参り候。さて床の掛物は冷泉為頼卿筆自画賛、坊主をさらりと書き候て大文字の仮名に、今こむといいしばかりの長月の有明けの月の歌、印二つ人形の衣紋に同印押し候てこれあり候。花生け金の物、黄梅、椿にて候、承順持参にて候。座敷張り付け銀砂子模様、金も少し入り、さび入り候。衝立に藤の下におらんだ人の通る様子これあり候。膳具朱塗り、料理色々申し尽くし難く候。尤も食後作柿の菓子に氷こんにやく少し出候て、追付上林三入園の濃茶二服立てられ候。四つ過ぎみなみな列れ立ち候て罷帰り候。四条に出候えば音羽山に月出候て、河原の景色面白く罷通り候。利兵衛、甲治御門外迄列れ立ち候て罷帰り候。

十九日　曇天

今日終日御屏風絵に相掛かり候。村井右膳殿へ禁裏御衝立の絵成就致し候間明日持参仕るべき旨申し遣わし候処、右膳殿非番にて加治掃部殿より返事参り候。明後日にてこれあるべく候、なお致来申し遣わすべき旨申し遣わし候。夕飯早く仕舞い候て木場源五兵衛殿、元春、権八同道致し、御影堂へ見物に参り候て、浄阿弥へ見舞い候えども風気にて臥し居り候故手代出合い候て挨拶申し候。地紙等見物申し候て酒出し申し候。直ちに帰路金屋半七へ皆々参るべき由申され御見舞い候処、そば切り出候て酒しい申し候。書物沢山に見物申し候。また昼の内白河禅外入来。追付南泉院同道にて伊勢の住僧絵見物に入来候。道昌庵承順事も昨日の礼に堀氏へ見舞いにて候。私へも逢い申すべき旨申され候て万右衛門殿玄関において一刻逢い申し候、梅花一枝持参候、香気別けて厚く候。建仁寺霊洞院へ見物の付け状頼み候て調えられ置き候。また押川六左衛門殿今日大坂へ下りに付きて御国元へ書状遣わし候。

二十日　晴天

今日罷出御屏風絵に取り掛かり候。妙心寺より全首座絵書所へ入来候。村井右膳殿より手紙到来、禁裏御衝立明廿一日四つ時罷出るべき旨、三沢壱岐守殿、小佐治阿波守殿より手紙この方へ遣わされ候。追付また衣着け仕るべき旨手紙にて申し来たり候、御請け申し遣わし候。南泉院より只今伊東源蔵殿入来候間、近付きに相なり候様にと申し来たり候間参り候て逢い申し候。堀氏はかの方へ朝飯振る舞いにて直ちに逢われ候、

暫し閑話を得候。さて今日江戸より米良藤右衛門殿上がりにて晩来見廻申し候。堀氏もかの方にて、万右衛門殿は追付立たれ候て、夜入り元春、権八入来。並河長兵衛事私宅へ来たり候由申し来たり候故、直ちに藤右衛門殿旅宿大津屋仲兵衛方へ呼び候て、酒茶の興面白く御座候。

都に侍りける時、公事につきて米良則倜雅丈のあづまのかたへ行きなびて、明けの春まだ都にてあい侍りしによめる

東路に行きかえり来し旅人に先ぞ問わるる富士の白雪

廿一日　晴天

今朝四つ前禁裏御衛立両面近衛様へ持参仕り候て御目に掛け候。村井右膳殿御取次ぎ遊ばされ御覧候処、殊の外よく出来仕り候、天覧いよいよ以て宜しかるべき旨御諚承知仕り候。左候て右膳殿同道にて禁裏へ参内仕り候、御台所御門にて三沢壱岐守殿へ御目に掛かり近付きに罷なり候。御内玄関へ参上仕り候て小佐治阿波守殿出られ候て御衛立御請け取り候。いまだ御奉行御出これなく候間、追付申し上ぐべく候由候。右膳殿申されれ候は殿下御諚に探元名印これあり宜しかるべく思し召し上げられ候。御奉行より天機を窺われその通りにこれありたく候。左候て探元参内仕り候て名印仕り候はば、自然書き損じ等これあり候てはいかが候間、近衛様へ相下され候て名印仕るべき由相達せられ候、委曲その意を得奉り候。御奉行御両人様へ申し上ぐべき旨阿波守殿仰せられ候間我々退出仕り候。私事直ちに殿下へ参上仕り候て御礼申し上げ候て罷帰り候。絵書所へ米良藤右衛門殿、万右衛門殿咄居られ候。米良殿は池之坊へ花稽古に近付きのため万右衛門殿同道にて出られ候。追付自性尼一刻入来候。左候処右膳殿より手紙到来申し候、禁裏より三沢壱岐守殿、小佐治阿波守殿より名印仕り候て差し上ぐべき由申し来たり候由にて、則手紙もこの方へ遣わされ候。則近衛様へ御衛立も参り候て早速罷出名印仕るべき由候。追付仕舞い候て参上仕り、右膳殿へ取り逢い候て申し上げ候処、名印何様に仕るべきと存じ候哉、書き候て御目に掛け候様にと御諚これあり、三通相調え御目に掛け候処、薩陽法橋探元と仕り候て宜しくこれある由仰せ出され候。その通りに書き調え印は浄徳堂法浄と申す唐彫りの印一つ押し申し候。今日は晩景に罷なり候間、明朝禁裏に差し上ぐべく候由右御取次ぎ衆より申し来たり候由にて御吸物、御酒下され候て御暇仕り候。直ちに万右衛門殿へ参り候て、右の次第委しく申し達し候て同道にて米良殿旅宿大津屋へ咄に参り候、清六殿、元春かの方にて候。藤右衛門殿立花立てられ候。追付並河長兵衛入来にて候、酒事候。万右衛門殿早く立たれ候て、跡にゆるゆる咄候て清六殿、長兵衛殿同前に四つ過ぎ罷帰り候。元春事はかの方へ泊り候えとの事にて相残り候。

廿二日　晴天　暖気

今朝米良藤右衛門殿へ堀万右衛門殿より朝飯振る舞われ候故相伴仕り候。左候て兼て道昌庵へ頼み候て建仁寺見物の儀手紙もらい置き候故、米良殿も同道致し候て元春事も召し列れ候。先ず霊洞院へ参り候て、案内者出され開山栄西禅師の像拝み申し候。石壇これあり候、山門の戒壇にて候由。亦南禅寺にこれあり候図の由にて、僧形にて如意を持ち候文珠の像これあり候、珍しき物にて候。直ちに方丈へ参り候て見物。客殿龍の間は友松、仙人の間同筆、本尊十一面観音は恵心仏、言語道断見事に候。奥の間外に人形の間もこれあり候、友松にて候。さてまた庭前の古松枝を垂れ候て奇観にて候。方丈の二文字は張即之にて候。裏に小庭あり額に清涼軒、先師の筆の由。さて直ちに織田家の寺正傳院と申すに参り候。先ず有楽老の茶室見申し候、図別に仕り候。客殿山楽筆墨絵の山水、達

旦人狩りの図永徳絵念書きと見え候て見事なる事に候。有楽の像これあり候、僧形袈裟。有楽の墓九重の塔正傳院殿如庵有楽とこれあり候。外に二墓宜しく候に付き、塔もこれあり候。また竹林の内に九重の塔これあり候故、寺僧に相尋ね候えば紹鴎の塔にて候由。由来泉州境にこれあり候を有楽老この地に引かれ候由。拝み候者もこれなくと見え候て垣を竹林に仕廻し、その裏にこれあり候。庭に差し出候て小き殿閣これあり候、これは往昔この地に蘭亭を模し候その亭の残りの由。庭の中門これまた、その時の図にて別けて念を入れ候物にて候。額に長好閣とあり巡見申し候て、案内者穆首座へ相別れ候。直ちに罷帰り候路玉光堂へ立ち寄り候て、たばこみなみな下され候。一刻絵書所へ参り候て相勤め候。夕飯後堀氏、権八同道にて誓願寺へ未開紅梅見物に参り候処泉式部、軒端梅みなみな盛りにて見物人多く候。直ちに錦の天神へ参り候て追付罷帰り候。直ちに清六殿へ立ち寄り候て酒、茶賞翫申し候。穆首座は道昌庵の二男なり。

廿三日　晴天　暖気

今日終日御屏風絵に相掛かり候。昼の内南泉院より麦飯振る舞いにて参り候、山下雲洞同席にて候。追付絵書所へ参り候てまたまた絵に取り掛かり候。宿屋次右衛門来たり候、罷帰り候て南泉院、木場源五兵衛殿、権八同道にて誓願寺梅見物に参り候。式部、軒端の梅未開紅最中盛りにて候、貴賤群衆にて候。弥陀如来の前に官香差し上げ候。さてそれより四条の方へ廻り候て歩行致し罷帰り候。

泉式部の軒端の梅を見て

見し人は古き軒端の梅の花色香は同じ春に咲くらん

廿四日　曇天

今日は堀氏、米良氏同道にて嵯峨見物と志し候えども、雨気相催し候故相延べ候。追付絵書所へ罷出候て終日相勤め候。元春事米良氏同道にて見物に相催し候由にて参り候。夜入り候て押川六左衛門殿咄に入来、吸物、酒出し候て閑談に及び候。やがて雨降り出し候。

廿五日　晴天　餘寒

今早朝越後屋市左衛門方へ庄右衛門遣わし候て、兼約申し候誓願寺未開紅泉式部、軒端の梅小枝取り寄せ申し候。左候て内々中島利兵衛方へ茶湯約束申し置き候故堀氏同道にて参り候に付き、米良藤右衛門殿誘い申し候えども隙入りにてその儀無く候、一刻かの方へ罷居られ候。追付絵書所へ罷出候て相勤め候。刻限宜しかるべく候間打立ち候様にと堀氏より承り候故同道にて、則中島利兵衛方へ罷越し候。中門より入り候て腰掛に円座、たばこ盆これあり、利兵衛親子罷出候。追付小座へ罷通り候処に茶湯道具付、

一　掛け物無窓国師寒山の大文字立物　但印あり
一　花梅に赤色小椿二輪、
一　筒二重切り遠州作　但二重切り上に花を入れ候
一　茶入唐物小肩衝　袋柿色緞子
一　茶碗熊川　高台土見え候　薬かき
一　茶杓紹鴎　節無し　筒はこれなく候由
一　釜　芦屋無紋　一　水差し楽の筒
一　香合交趾物　一　炭入れ　ふくべ
一　会席色々　一　菓子　蓬まんじゅう　かえ出し

右相済み候て書院へ通り候、長き路地中門二つ通り候て広庭これあり候。床の掛け物友清筆三聖人の図大横物、棚に折本手鑑松花堂一筆の詩歌色